昭和48年7月29日発行通巻123号(毎日曜日発行) 昭和48年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

AE 朝日=ラルース

7/29
220円

122

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目次

世界動物百科　第122号

カラーページ

私たちの仲間

表紙　フラミンゴ
Ph. J. Burton-Bruce Coleman Ltd.
表２　**日本迷鳥録**　モリツバメ

監修　森岡弘之（国立科学博物館研究官）
翻訳　大沢寛三（本誌編集部）

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 55

モリツバメ

Artamus leucorhynchus



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

日本へきた迷鳥のふるさとはどこか。これについてはすでに，登場させた各種ごとに述べてきた。たとえば，ケワタガモ類のふるさとは極北部，カツオドリ類のふるさとは南洋諸島，さらにアシナガコシジロウミツバメでは亜南極圏といったぐあいであった。ホオジロ類やシャクシギ類については，ユーラシア産と北アメリカ産という東西の系統に分けられるという話もした。要するに，鳥は日本を取りまくあらゆる地域から迷行してくる。しかし頻度からいえば，北の鳥，西の鳥が多く，南の鳥，それも陸の鳥の迷行は少ない。その意味で，最近のモリツバメのニュースは希少価値があろう。

モリツバメは，ほんとうのツバメ類ではなく，モリツバメ科に属する熱帯の鳥で，全長約18センチ，背面黒褐色，腹と腰は白，くちばしは灰色で目だつ。フィリピン以南のマライ諸島，ミクロネシア，オーストラリアに分布し，1973年４月９，10日，沖縄県西表島祖納で柚木修君らにより１羽が発見された。■

幻の動物を追って 4

ヒバゴン 古事記の里のロマン

私たちの仲間

122号…7月29日





「でってでっ出たーっ」
「どっどっどうしたんです。何が出たんですか，えっ何です？」
「何がって，ほらほらカイジュウですよ，怪獣！」
「怪獣？　ああ，あれ……。意外につまんないものですね」

左　『読売少年新聞』に掲載されたヒバゴン想像図
右　西城町発刊のパンフレット中のヒバゴンのモンタージュ
どちらがよりホンモノに近いのか？

▶東西怪獣考◀

ひと口に怪獣といっても，それによって喚起されるイメージはさまざまであろう。源三位頼政が射取ったといわれる〝鵺〟という怪獣などは，いろいろな動物の部分部分が集まってできたものの典型である。頭はサル，胴はタヌキ，尾はヘビ，手足はトラで，鳴き声はトラツグミに似ているというのだから，それはもう奇妙奇天烈，荒唐無稽さもきわまったものといえる。

こうした〝雑種〟型怪獣は中国，日本だけでなく，ヨーロッパにも数多くある。いや，怪獣のほとんどが，この〝雑種〟型なのである。セイレーネスは鳥のからだに婦人の顔をもち，長い髪をなびかせて空を飛ぶ怪獣だし，ミノタウロスは半人半牛の怪物，ケンタウロスは半人半馬である。スフィンクスは上半身は女で下半身はライオン，キマイラはライオンとヤギと竜の各部分を合成した火を吹く怪獣であるなど，数えあげればきりがない。

しかし，怪獣が〝雑種〟で〝過剰の〟ものだけだと思ったら大まちがいで，〝欠如〟が売り物の怪獣もまた存在する。

ひとつ目小僧やひとつ目入道などは，『出雲風土記』にもでてくるそうだし，ホメロスの『オデュッセイア』中のキュクロープスも，ひとつ目の巨人である。また，アフリカのリビアにすむと伝えられるスキヤポデスなる怪獣は，足がかかしのように1本しかないらしいのだ。

さらにまた，鳳凰，麒麟，白虎，青竜，朱雀，玄武など，神とも化け物ともつかぬ，わけのわからぬ怪獣も数多い。魑魅，魍魎などというものも，こういう手合いをいうのだろう。

しかし，こうした怪獣は，自然のなかにまったくその類似物を見いだしえず，呪術的意味こそ持ちはするが，科学的認識のはなはだしい欠如を示すものなのだが，これとはやや異なり，寓意や風刺としての怪獣もまた，歴史的に存在している。ここまでくると，それらは怪獣と呼ぶのがふさわしいかどうか，はなはだ疑問なのではあるが……。

前述の鵺などは，正体不明，わけのわからないものの意になっているし，このほか，メランヒトンが考えだした法王ロバや，ルターが創造した牛坊主など，15，16世紀ヨーロッパの法王や僧侶階級を皮肉り，風刺した怪獣もいる。

さて，歴史的産物としての怪獣はともかく，科学万能の現代における怪獣とは，いったい，いかなものだろうか。

「怪獣」という語が，奇妙な生きもの，不思議なけものだというのなら，未知な領域が次から次へと既知なものへと転化してくる現代では，それは未確認の生きものといいかえることができるかもしれぬ。あるいはまた，殺伐とした現代人の心に，夢と冒険心を駆りたてるものということもできるかもしれない。

小さな子どもを動物園に連れていったとしよう。はじめてゾウやトラやライオンを見せても，子どもは泣きわめきもしなければ，腰をぬかすこともない。

どうしてなのだろう。以前からテレビや雑誌で，それらを見知っていたからかもしれないし，山や川や森，親や兄弟を認めるのと同じように，猛獣をも，ありのままに認めてしまうのかもしれない。子どもたちにとって未知なる〝怪獣〟であったかもしれないのに。

こうしたことから考えても，現代の怪獣は，怪奇さ，不可思議さ，恐怖，驚きを与えるものとしてのそれではなく，ナンセンス，ユーモアを振りまくものとしての怪獣でなければならないのかもしれない。その証明として，数年前に巻きおこった怪獣ブームをあげることができる。怪獣はまったく子どもたちのアイドルとなってしまい，正義の味方の怪獣まで出現するにいたった。また，社会戯評まがいのヘドロ怪獣やスモッグ怪獣も出現したのである。

▶ヒバゴン登場◀

ところがここに，突如として怪獣が現われいでたのだ。所は広島県比婆郡西城町，ときは1970（昭和45）年7月20日午後8時。発見者は同町油木地区に住む丸崎安孝さん（31歳＝当時）。

西城町というのは広島県の北端，島根・鳥取・岡山の県境に位置する人口1万人ほどの過疎の町である。周辺は標高1279メートルの立烏帽子山を中心に，標高600～1000メートルの山々に囲まれており，山間を清流が，あるときは激しく，またあるときは淵をつくって下っており，騒音も煤煙もなく，日本じゅうどこにいっても見られるような，なんの変哲もないいなか町なのである。

とはいえ，怪獣が現われるからといって，人跡まれな秘境や辺地，『マクベス』のナーバムの森のようなところを想像したら大まちがいだ。国鉄も通っているし，国道は完全舗装，鉄筋の病院や学校もあり，家々もがっしりとしていて大きな造りである。

確かに，一歩山のなかに踏みいれば，ブナの原生林あり，クマザサやシダ類のブッシュありで，いまにも，ぬっと何かが現われるのではないかという気もしないではないが，さりとて，格別西城町，いや，比婆山中に特有なものとてないようであった。

このあたりが，いかにも期待される現代の怪獣たるゆえんかもしれないのだが，最初の発見者である丸崎さんによれば，そいつは，大きさが子ウシくらい，ゴリラみたいな怪獣だったという。

丸崎さんにつづいて同じく油木地区で，今藤実さん，伊折茂さん，谷平覚さん，田辺光子さんの4人が，同年9月3日までの間に〝怪獣〟を目撃したと届けでた。静かな町は，あっというまに議論百出，喧々囂々の騒ぎとなったのは，いうまでもない。

ヒバゴンの目撃と足跡発見の年月日　　丸数字は届出順



①1970年	7月	20日	20時
②	7	23	5
③	7	30	20
④	8	30	19
⑤	9	3	8
⑥	10	8	朝
⑦	10	12	15
⑧	7	9	15
⑨	11	20	朝
⑩	11	11	20
⑪	11	13	6
⑫	12	16	10
⑬1971年	3	21	昼
⑭	9	4	10
⑮	9	7	14
⑯	9	3	18
⑰	9	14	17
⑱	10	24	昼
⑲	12	15	16
⑳1972年	4	2	朝
㉑	5	24	13
㉒	8	14	朝
㉓	11	7	12
㉔	11	29	7
㉕1973年	2	3	18



2代目類人猿係の見越敏宏さん
ヒバゴンの出没状況を示した看板の前で勇姿を示す



『中國新聞』がおくるヒバゴン決定版？

あれはサルにちがいない。
いや人間だ。
機動隊をただちに出動させよ！
いや、自衛隊の出動を要請して、山狩りを行ない、真相を徹底的に解明すべきだ！
猟友会に頼んで射殺するのが得策だ！
いや，麻酔銃を使って生けどりにするんだ！
まだ被害らしい被害はないのだから，放っておいてもいいんだろう。

と，まあ，こんなぐあいである。そして，住民生活の治安確保に責任を負う警察が捜査に乗りだしたのも，これはまた当然の成りゆきである。しかし当初，警察も地元民の話からサル説を有力視しており，またあまり大騒ぎして住民の不安をかきたてることは好ましくないとの考えから，パトロールの強化程度に，その対策を限定していたようだ。

そんなさなか，10月8日に〝怪獣の体毛と足跡〟というのが発見されたのだからたまらない。マスコミ関係各社がドッと西城町に殺到，その数延べ27社におよんだ。

▶町役場に「類人猿係」◀

その足跡と体毛が発見されたのは，「県民の森」と呼ばれるキャンプ場兼ハイキングコースで，足跡の数は12個。縦20センチ，幅15センチほどのものであった。これは後日，発見者たちによってゆがめられていたことがわかり，同時に発見された体毛も，人毛と羊毛であると鑑定されたのだが，一度火のついた騒ぎを消しとめることはできなかったようだ。

さらに，その直後の10月12日に，再び足跡5個が発見された。これは縦14センチ，幅7センチほどのものであり，先の目撃者たちも，最初にかれらが発見した，手で触れてみるまえのものと，そっくり同じだと証言した。

それでは，こんな騒ぎを引きおこした怪獣は，どんな形をしているのだろう。目撃者たちの証言をまとめて，当時の地元庄原署の署長で，現広島県警鑑識課長の大前行雄氏は次のようにいう。

身長1.6メートルくらい。
顔面がやや逆三角形で鋭い目つき。
頭は長さ5センチくらいの剛毛におおわれている。
ゴリラによく似ている。
からだ全体が茶褐色の荒々しい毛におおわれている。
立ったりすわったり，四つんばいになったりして，動作が緩慢である。
子ウシほどの大きさである。

また西城町当局も，目撃者の話を総合してモンタージュ写真をつくったりした。各種新聞，雑誌にも〝想像図〟なるものが載せられ，それぞれ〝決定版〟ヒバゴンとうたっているが，どれも決め手を欠いているように思われる。なにせ資料となるものが非常に少ないのだから。

しかし，何はともあれ，この騒動でいちばんの迷惑をこうむったのは目撃者たちだっただろう。朝に夕に，報道関係者に追いまわされ，同じ話を新聞に，テレビに雑誌にと繰り返し，仕事が手につかぬほどで，学者の意見が怪獣の存在について否定的だったりすると，嘘をいったと非難され，またテレビ出演などすればねたまれたりといったこともあったようだ。

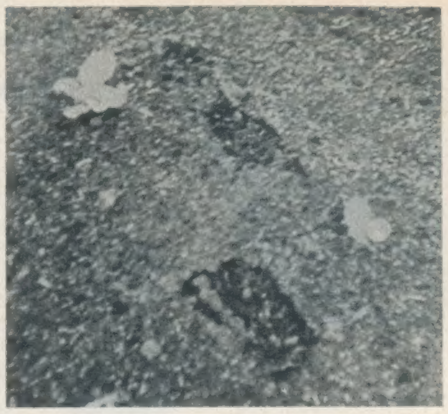
そこで，こうした事情をくんだ智木田稔町長のイキな取りはからいで，怪獣目撃者には金5000円也の〝迷惑料〟が支払われることになり，マスコミ各社に対しても窓口を一本化し，農林商工課内に「類人猿係」なるものを設置したのである。そのうえ，「類人猿出没対策費」20万円なるものも計上されたというから，実に手まわしがいい。

その「類人猿係」は1970年10月に設置され，初代は恵木剋行さん，現在は翌々年4月1日に2代目に就任した見越敏宏さんが引きついでいる。町役場には怪獣関係の資料がファイルに6冊分もあり，おまけに「類人猿係就任の辞」なるものまで印刷されている。

こうした組織的な町の対策が的を射たのか，怪獣出現のタイミングが時代精神によくマッチしたのか，あるいはマスコミの力が偉大だったのか，〝ヒバゴン〟はまたたくまに有名になって，その名が遠くブラジルにまでおよんだという。役場の職員たちが研修会などで，「西城町の某々です」というと，「ああ，あの怪獣の……」と，全国的に西城町の名が知れわたったことを自認する。

しかし，西城町刊行の広報パンフレット『西日本のハイランド　さいじょう』の巻頭で，〝ヒバゴン〟を「世界三大怪獣のひとつ」と銘打ってあるのを見ると，どうにも笑いがとまらなくなってくる。

さて，ここに〝ヒバゴン〟なる名が定着してしまったのだが，それが類人猿かどうかとなると，それは全然はっきりしていない。「類人猿係」の見越さんも，「まだ類人猿ときまったわけではないのだから，怪獣係のほうがいいかもしれない」といい，「〝ヒバゴン〟という名称は，当時の怪獣ブームのなかで，比婆山中に出た怪獣なら〝ヒバゴン〟だろう，と子どもたちがいいはじめ，それを『中國新聞』が最初に使ったようですね」という。また，西城町を訪れた詩人の寺山修司さんも，『旅』4月号のなかで，「人びとは怪獣の印象の最大公約数を類人猿に求め，目撃者たちも自分の体験のリアリティを保証してもらうためにツジツマをあわせた……」と書いている。



怪獣の足跡ってホントウ？　写真提供　西城町役場

▶その正体やいかに◀

そうこうするうちに，1970年11月には，怪獣のものと思われる多量のトウモロコシの食べかすが発見された。そして1971年9月，10月，12月，1972年4月，5月，8月，11月と発見者が相次いだ。目撃場所もはじめ集中していた西城町油木地区からしだいにひろがり，東城町，比和町と，隣町にもおよぶようになった。

こうした評判を聞きつけて，夢と冒険を求める若者たちが，続々と地元を訪れた。1970年10月の神戸大学探検部「類人猿調査隊」を皮切りに，名城大学探検部「未確認生物調査隊」，同志社大，広島工大，拓殖大の各探検部が怪獣の正体を解明せんと，キャンプを張った。また，神戸のボーイスカウト隊も，さまざまな試みを行なった。

若者たちは，カメラ，双眼鏡，トランシーバー，石膏などを持ち，ブッシュこぎをしながら，怪獣を求めて比婆山山麓に分けいった。あるパーティーなどは，人間大の動物が触れれば，ブザーが鳴るというような装置を1キロ四方にわたって取りつけ，怪獣の正体をきわめんとしたのだが，結局すべての試みは失敗し，足跡など多数を採取したものの，決定的な証拠をつかめず，「やはり，何かがいるのかもしれない」という夢を残して帰っていったそうだ。

大前氏は鑑識課長となってから，当時の対策について，いささか反省するところがあった。

「この怪物に対する資料は目撃者の証言と鑑定価値のない足の痕跡以外にはない。現場鑑識にしても，広大な中国山地に出没するのだから，証人の確保は遅れるし，足跡だっていつのものやらさっぱりわからず，風雪や人によってつねに変形されている。しかし，現場に集塵機を持ちこんで怪物の毛を収集したり，トウモロコシの食べかすから歯牙痕を鑑定したり，酵素型，唾液型を鑑定しておれば，人か動物かの区別は判別していただろう」（広島県警発行『いずみ』1972年



記念すべき〝7・30〟こんな人家近くに出没するなんて大胆不敵！



西城町内の9か所には　こうした怪獣出没地のモニュメントが建てられているのです

1月号）

確かに，現代の科学警察の総力をあげて怪獣の正体究明にあたれば，それも決して困難ではなかったにちがいない。

ここで，もうひとり，怪獣騒動のはじめから調査にあたった広島の安佐動物公園園長の小原二郎氏に，怪獣の正体についてたずねてみよう。

「まあ，ひとことでいえば，人間を含めた霊長類といえるでしょう。現存する動物を取りあつかうのが，わたしの専門なので，そうした観点から見ると，動物行動学的に理解できないことが多すぎるのですよ。類人猿説，サル説，クマ説等々いろいろありますが，〝ヒバゴン〟が新種の動物だとも考えにくいのですね」

わかりにくいかもしれないが，たとえば足跡がえさの多い広葉樹林帯からえさの少ない針葉樹林帯へと続いていたり，川を渡ったり，目撃場所の点と点を結んだ面積が広く，しかもそれが散っていることなどから，現存する動物の行動では測りきれないのだが，しかしまったくの新種が，突如出没したというのも，いかにも合点がいかないというのだ。

ここで，〝ヒバゴン〟についての諸説を紹介しておこう。

（A）類人猿説

目撃者の証言をもとにつくられたモンタージュ写真などは，やはり類人猿に似ている。それも，オランウータン説が有力なのである。現在登録制が敷かれているオランウータンが，それ以前に密輸入され，脱走するか，持ち主が山に捨てるかしたものが生きのこっていたというものである。

しかし，冬は積雪が1メートルにもなる比婆山中で，しかもクリ，どんぐり，カヤ，アケビなどの木の実しかないような自然環境のなかで，東南アジアの熱帯林にすむオランウータンが数年も生きのびられるだろうか。それに，類人猿は夜あまり活動しないはずで，その点，出没時間に夕暮れが多い〝ヒバゴン〟とは，ちょっと違っているようだ。

（B）ニホンザル説

比婆山麓には多くの野生ザルが群れをなしており，夕闇のなかで突如現われた大ザルを，怪獣と見誤まったのではないか，というのがこの説である。

だが，いかに大きいとはいっても，ニホンザルは体重20キロほどであり，とても目撃者たちが主張するような60〜100キロ，身長160センチの怪獣にはなりそうもない。そして目撃者も，いかに唐突な出合いであっても，サルかどうかの判断ぐらいはつくはずだ。各探検部の調査によると，怪獣の足跡の近くに，明らかにニホンザルのものとわかる足跡もあったと報告している。

（C）クマ説

これは名城大学探検部の説だ。かれらの発見した足跡は長さ27センチ幅17センチのグローブ状のものだったのだが，これを前足とあと足とが重なってできたものと見るのである。とすると，怪獣出没の時間帯はクマの行動時間と合致するし，怪獣の外観ともある程度は符合する。

ただ，ここ数年どころか，ずっとむかしから，比婆山中にクマを見たものもなく，また目撃者談のほとんどが，直立している怪獣を見たといっているのに，クマは興奮したときとか，人を襲うときなどには直立することはあっても，そうたびたび両足で立っているわけではない点なども考えあわせると，この説にも弱いところがある。

（D）人間説

この説はもうさまざまで，どれもほんとうらしく，同時にどれも信じがたい。たとえば，顔がサルそっくりで，泣き声もキャーキャーいっていた木登りのじょうずな子が行方不明になっているとか，むかし，全身毛におおわれた子どもがいて，頭と手につねにぼろを巻いていたが，もしやあの子ではないかとか，比婆山の山守と称する男が行方不明になったとか，すねから下が素膚の，毛皮をまとったセムシの乞食を見たとか，はては，戦時中のスパイ説や犯罪者説，被爆者説までまさに諸説紛々。ひどいものではサルとの媾合で生まれた子どもを山に捨てたが，その子が大きくなったのだというような，むちゃくちゃなのまである。

さらに，このほか，政治的陰謀説がある。これは総工費12億円をかけ，1968年から着工した「県民の森」の名を売るために，町長か町役場の職員が，オランウータンかなにかのぬいぐるみを着て，あたりを徘徊したのだというのである。

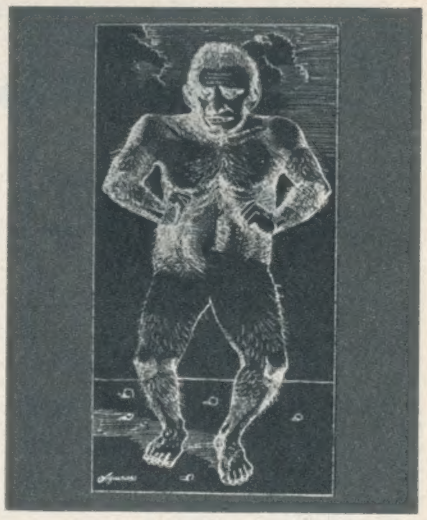
これは，かつて京都大学でこの怪獣を調査研究するため，自衛隊に山狩りをさせて怪獣捕獲を試みようとしたとき，町長が「もし強行するなら，町民全員を狩りだしてでも，阻止する」といったことや，「県民の森」オープンと怪獣出現が，あまり符合していたために考えられたものである。

▶怪獣保護の諸問題◀

結局，怪獣の正体については，何ひとつはっきりせず，その解決はすべて時の流れにまかせるしかなさそうだ。

ところが話は違うが，この比婆山の歴史は，遠く『古事記』にまでさかのぼるのだ。若干の説明を加えると，比婆山の中心御陵山は，またの名を美古登山ともいい，イザナミノミコト（女神）が最後に火の神イカヅチを生んで死に，そのなきがらを「出雲国と伯耆国の堺なる比婆の山に葬りき」と記された，そのミコトが美古登＝命なのだという。だから，怪獣についても，土地の老人たちのあいだでは，イザナミノミコトの霊ではないのか，とささやかれたらしい。

このように，長い歴史と伝説のふるさとである比婆山麓に現われた怪獣なのだから，その正体解明にあせることもないのではないか。つねづね，黒か白かをはっきりさせなければ気がすまないのが日本人の悪いクセだともいわれるくらいなのだから。「現在でも……」と見越さんはいう。「ヒバゴンをつかまえて動物園に売ったらいくらくらいになるでしょうかとか，捕獲して見せ物にしてもいいのでしょうかとか，写真をとったら100万円で売れるというのはほんとうでしょうかなどといった手紙や電話がきます。いままでに届いた手紙は，もう1000通以上になるんじゃないでしょうか」。



『旅』4月号に掲載のヒバゴンは人間説？

ヒバゴンの人気はいぜん衰えていないようだ。小さな子どもが，「ヒバゴンを殺すのはかわいそうだから，動物園でたいせつに飼うようにしてほしい」とか，「いまいるところにずっとすませておいてほしい」などと書き送ってくるそうでもある。

智木田町長も，「なぞとロマンは残しておいたほうがいい」といい，小原氏も「西城町のようなところは，現代の民話が生まれる唯一の場所なんですから，カナダのサスカッチ（アメリカ大陸北西部山岳地帯にすむ巨人型原始人類？　で，ビッグ・フットとも呼ばれ，足跡などが多く見つかっている。なおサスカッチは，インディアン語の合成語で森の魔物の意）のように，町で保護条例をつくって，探検隊などの捜索や，写真をとろうとする人たちを締めだし，ヒバゴンをまさに現代におけるメルヘンとして保護（？）しておこうではないか」という。

しかし，実際の目撃者たちは，自分たちの証言の正しさをあかしてほしいだろうし，夢とロマンを追求する若者たちも，なんとか真相を究明したいといっている。名城大，神奈川大などで組織された東海学生探検会議は，結成記念行事として，再び比婆山麓の怪獣の正体を見きわめるため，今秋にも出発するそうである。

地元では，ことしの2月3日，同時に3人がヒバゴンを目撃したことや，4月28日昼前に県民の森に通じる国道上で営林署員が見かけたことを重視し，秋の観光シーズンを前に手ぐすねをひいて，やじ馬たちの到来を待っている。

ヒバゴン人形からヒバゴンマンジュウ，はては交通安全祈願の人形にまで利用されているヒバゴンの正体やいかん。

あなたはどう思います？　■

（鮎川記者）



ヒバゴン騒動の黒いウワサの源　県民の森は　とてもすてきなキャンプ場



とうとう出ました
交通安全祈願の
実物大？　ヒバゴン
現代に生きる怪獣の
最後に残った生きる道



だれが名づけたか
ヒバゴン人形
小は一金280円也
大は550円と割安です
特徴がよくでています

アマゾン動物記 33　伊沢紘生

イヌには食わせられぬ鳥

≪パウヒリは重かった≫

アマゾンの数多い鳥のなかで，前述のパワと同様，肉の美味な鳥として，現地の猟師たちからパウヒリという名まえも早くから教わっていた。

パウヒリにはじめて出合ったのはやはりカケタ河へ調査にはいり，最初の予備調査をカグアン河下流の森で行なったときであった。森の奥の，かつて木材を切り出すときにつくったという朽ちかけた廃屋で一夜を明かした次の日の朝，歩きはじめて少しいった薄暗い低湿林のなかで，先頭を歩いていたヒルベルトが「パウヒリがいる」とすぐ後ろの荻野さんに耳打ちした。荻野さんはわたしが低木の下枝にやつを見つける前に，散弾銃の引き金を引いてやつをしとめた。

太くて短い，だいだい色をしたくちばしを持ち，頭頂に黒い羽冠が突ったっているニワトリよりもひとまわり大きな鳥だった。つばさがいくぶん黒みがかっているほかは，からだ全体が茶褐色で，きれいな鳥とはおせじにもいえないが，そのくすんだ単調さが頭部のりっぱな羽冠と美しいくちばし，それにまぶたの上の黄色とほおの灰色を逆に引きたたせていた。

こいつはカンムリホウカンチョウであった。いちばん後ろを歩いていたわたしは，ホボやヒルベルトがかわるがわる先頭に立ってツタや下ばえをマチェテで切りはらい，道を開きながら歩いているので，「パウヒリはわたしが持つ」といってそいつを受けとった。そしてやつのあしを持ってぶら下げて歩きはじめたが，そのずしっとした，やつの重さにじきに手がしびれ，握った指が痛くなってしまった。3キロはあったと思われる。

≪パウヒリの骨≫

その日の夕方，わたしたちはパウヒリと，さらにその先で撃ったクビワペッカリーの肉とをいっしょに煮て夕食のおかずにした。わたしはアフリカのサバンナにいるとき，食用にたくさんのニワトリをキャンプで放し飼いにしていたが，雄のニワトリはじきに大きく，みるからにたくましくなった。そのぶ厚い，かたくしまった肉といい，甘みの少ない大味な肉といい，このパウヒリの肉そっくりであった。もしパウヒリが森のなかにたくさんいれば，キャンプで飼う手間がはぶけるだけでも楽だな，などと考えながら，パウヒリの肉をほおばった。そして肉を食べおわって残りの骨をイヌに投げてやろうとしたら，「イヌには絶対にやるな」とホボとヒルベルトが口をそろえていった。

「どうしてだ」

「パウヒリの骨はイヌにとって最上等の食い物で，もしこの骨を食べさせたら，森にはいっても，こいつばかり追って他の動物には見向きもしなくなる」

「先日ニワトリの骨を与えていたではないか」

「ニワトリの骨ならかまわない」

わたしにはもうひとつ合点がいかなかったが，かれらにいわれるままに，それから食べた残りのパウヒリの骨を全部ドンブリの中に入れておいて，あとで川にいって捨てた。



サルヴィンホウカンチョウ

≪パワとパウヒリを撃つ≫

ベネージャ川のほとりにキャンプを建てて調査を開始してまもないころ，朝早くキャンプの少し下手の大木にパワがやってきた。わたしはヒルベルトに「撃ちにいこう」と誘った。そしてパワのいる大木の下まできたとき，10メートルぐらい先の下ばえのなかから2羽のパウヒリが突然飛びたち，丈の低い木の下枝にとまった。

からだは全体が青みを帯びた黒色で下腹部の純白ときわだったコントラストを見せていた。大きなくちばしの朱色が薄暗い朝の森のなかでもはっきりと識別できた。こいつはサルヴィンホウカンチョウ（*Mitu salvoni*）であった。

わたしはすぐに1羽のパウヒリをねらって落とし，つづいて飛びたちそこねていた大木の梢のパワを落とした。その大木の所から先はベネージャ川の増水のため目下浸水していて，沼のような状態になっていた。2羽はその沼の向こう側へ落ちた。深さも，何がいるかもわからない沼のなかへはいっていくのは気がすすまなかった。しかも，昨日洗濯した服を，今朝着替えたばかりである。わたしはためらった。かってについてきたイヌはヒルベルトに首をつかまれながらいきり立っていた。

「ドクトールどうする」

「………」

「イヌに食わすとまずい」

わたしは意を決して水のなかにはいり，2か所深みにはまって，首近くまで沈んだが，灌木の木の枝につかまってやっとむこう側に渡り，2羽をかついでキャンプにもどった。

その日の夕食のときである。パワとパウヒリの肉をいっしょにして大きなナベで煮ておかずにしたが，ヒルベルトはわたしたちに骨をイヌにやらんでくれと頼み，ナベのフタを持ってきた。

夕食後，かれはナベのフタいっぱいにたまった骨のなかから，パワの骨だけをイヌにやり，パウヒリの骨は全部川へ持っていって捨てた。わたしはきょう1日の経験から，カグアン河の旅のときのヒルベルトのいったことの意味が理解できた。

≪イヌに食わせぬわけ≫

すなわちパワはいつも大木のてっぺんにいて，地上におりてくることがないから，こいつの骨をいくらイヌに食わせても，イヌがパワを追いかけるということはあり得ない。しかしパウヒリはパワと違い，地上におりて，落ちた木の実や昆虫類を食べている。したがって，イヌを連れて猟にいったとき，もしイヌがパウヒリのにおいを覚え，味を覚えていたら，パウヒリはイヌにとってはけものの骨よりはるかに柔らかいうまい骨にちがいないから，イヌはけものを追わないでパウヒリばかりを追うようになってしまう。そうしたら，毛皮をとるためにジャガーやオセロットを，食料として，ペッカリーやバクを撃つことをいちばん実入りのいい猟と心得ている猟師たちにとってはたまったものではない。しかもパウヒリは森のなかにはジャガーやオセロットや，ペッカリーやバクよりもずっとたくさん生息していた。

ベネージャ川の森ではこのサルヴィンホウカンチョウにこのあと3回出合った。一度はつがいでいる両方を撃ちおとしたが雄の体重は3.5キロ，雌は3.2キロあった。しかしカグアン河下流の森で出合ったカンムリホウカンチョウには一度も出合えなかった。

ホウカンチョウのことをここの現地人は総称してパウヒリと呼んでいるが，このパウヒリということばは，ペルーからボリビアにかけて住んでいる原住民の土語である。■



しとめたサルヴィンホウカンチョウの雄



コウノトリ目

Ciconiiformes

コウノトリ目はサギ目とも呼ばれ，7科約120種の渉禽からなる。このうちフラミンゴ科の鳥はガンカモ目に近い特徴もそなえており，また，くちばしの形なども特異で（後述），しばしば別の独立目とされるが，ここでは，くびやあしが長いことなどから，便宜的にコウノトリ目に含めることにする。

いずれも沼沢地や浅瀬を歩きまわりながら魚や昆虫（こんちゅう），カエルなど，おもに動物質のえさをとって生活している。これに対応して，さまざまの形態的特徴をそなえているが，ここでは，とりあえずその外形的特徴だけを列挙しておこう。

- 一般にくびとあしが長い。
- くちばしは一般に長く，まっすぐである。
- つばさは幅広く，先が丸くなっている。
- ももは少なくとも下半分が裸出している。
- あしゆびのあいだには痕跡的なみずかきしかついていない。
- 雌雄の羽色（うしょく）にはほとんど違いが認められない。
- 全長は35～150センチ。

この目の鳥には，コウノトリやトキ，サギなど，一見ツル目の鳥に似たものが多い。しかし，コウノトリ目とツル目では，頭骨などの内部形態に明確な差異が認められ，また，ひなの発生の過程も異なっている。つまり，ツル目の鳥のひなが早成型であるのに対し，コウノトリ目では晩成型で，生まれたひなはある期間巣にいて両親に哺育されるのである。このほか，ツル目の鳥は地上性で木の枝にとまれないのに対し，コウノトリ目の鳥はとまることができ，巣を樹上につくるものが多いなど，さまざまの違いがある。

コウノトリ目

科	属
フラミンゴ科	フラミンゴ属，コフラミンゴ属，アンデスフラミンゴ属
サギ科	アオサギ属，ヒメアカクロサギ属，アカガシラサギ属*Ardeola*，アマサギ属 コサギ属，ユキシロサギ属*Leucophoyx*，ゴイサギ属，ササゴイ属，ミゾゴイ属 トラフサギ属*Tigrisoma*，ヨシゴイ属，サンカノゴイ属
ヒロハシサギ科	ヒロハシサギ属
ハシビロコウ科	ハシビロコウ属
シュモクドリ科	シュモクドリ属
コウノトリ科	アメリカトキコウ属*Mycteria*，トキコウ属，スキハシコウ属，コウノトリ属 ハゲコウ属，セイタカコウ属，クラハシコウ属，アメリカハゲコウ属
トキ科	クロトキ属，ムギワラトキ属*Carphibis*，ハゲトキ属*Geronticus*，トキ属 イボトキ属*Bostrychia*，ハイイロトキ属*Harpiprion*，シロトキ属*Eudocimus* ブロンズトキ属，ヘラサギ属，ベニヘラサギ属

この表はコウノトリ目の代表的なものだけをあげた。学名を併記してある属は，本文に出てこないものである。

コウノトリ目の鳥には魚とりの名手が多い。
たいていは沼沢地の近辺に居を構え
動物質のえさを食べて暮らしている。
写真はサギ科ササゴイ属の
ガラパゴスササゴイ *Butorides sundevalli*。
撮影　内山　晟

フラミンゴ科

Phoenicopteridae

フラミンゴの仲間はクジャクやペンギンとともに動物園の人気者のひとつである。たいていの人は，バラ色にほんのり染まった可憐な姿のかれらが，いまにも折れそうな細長いあしを器用にあやつって歩きまわるさまに，しばしの間，時を忘れて見とれたことがあるにちがいない。

一般にフラミンゴと呼ばれる鳥は3属4種に分けられる。いずれもくびとあしが非常に長くて，背が高く，浅い水中を歩きまわるのに適した鳥（渉禽）で，からだに対するくびとあしの長さは鳥のなかでもっとも長く，体格的にはサギやコウノトリに似た点が多い。しかし，3本の前趾（ぜんし）のあいだによく発達したみずかきがあり，上下のくちばしの縁に櫛状の歯をそなえている点や，ひなが厚い幼綿羽（ようめんう）に包まれて生まれ，すぐにその巣を離れる（早成性）というような事実から見ると，ガンやカモ類に近いともいえる。また，その鳴き声や鳴管の構造も，明らかにガン類に似ている。このため，学者によっては，フラミンゴはガンカモ目とコウノトリ目の中間的存在だとする人もあり，また，フラミンゴ類だけでひとつの独立目とすることも多い。いずれにせよ，もっと多くの事実が明らかにされなければ，その分類学的な位置を確定することはできず，ここでコウノトリ目に含めたのはあくまで便宜的な手段にとどまる。なお，フラミンゴ類の羽毛に見られるバラ色は，食物の緑藻類などに含まれたカロチノイドの働きによるものである。

フラミンゴ科の鳥はユーラシア大陸の西南部，アフリカ，西インド諸島，南アメリカにすんでいるが，その繁殖地はあちこちにちらばっていて不連続的に分布している。ヨーロッパやアフリカでは平地や海岸に生息しているが，南アメリカではアンデス山脈中の標高4500メートルにおよぶ塩水湖で繁殖するものもある。フラミンゴの仲間は鳥類のうちもっとも密群性で，大きなコロニー（集団営巣地）をつくって繁殖する。現在もっとも多くのフラミンゴが見られるのは熱帯アフリカで，大小の塩水湖の周囲では，今もなお，数えきれないほどたくさんのつがいが営巣している。しかし，元来が臆病な鳥なので，文明の発達とともにコロニーが脅かされることが多くなり，だんだん数が少なくなっている。一方，この風変りな鳥を保護すべく，さまざまな手段も講じられている。そのひとつとして，アメリカ合衆国ではフロリダの南部に新しいコロニーを人工的につくり，西インド諸島から移入したフラミンゴを自然に定着させようとしている。

フラミンゴ

Phoenicopterus ruber

種としてのフラミンゴは，他のフラミンゴ類と区別するためにオオフラミンゴということも多い。ここからもわかるとおり，フラミンゴ科の最大種で，全長約190センチ，つばさの開張約150センチ，体重2～4キロもあり，ヨーロッパでは最大の渉禽となっている。羽色はふつうバラ色がかった白で，肩つまり雨覆（あまおおい）は赤く，風切羽（かざきりばね）は黒い。しかし，西インド諸島にすむ亜種は全体に濃いピンク色をしており，これをとくにベニフラミンゴと呼ぶこともある。いずれも雌雄同色である。例の長いあしもバラ色で，大きなくちばしは先半分が黒く，基部がバラ色と黄色を帯びている。

このくちばしは非常に特異な形態をもっている。つまり，下くちばしが大きく箱形になっており，一方，上くちばしは下くちばしよりも小さくて，あたかも，下くちばしに対してふたのようになっているのである。しかも，上下のくちばしの縁にはそれぞれ角質の櫛歯があり，たがいにはまりこむようになっている。舌は非常に肉づきがよくて厚く，よく神経がいきわたっている。フラミンゴはこの舌をピストンのように前後に動かしながら，水やどろを口中に入れては出し，そこに含まれた細かいえさを櫛歯でふるいわけて食べる。ついでながら，この舌は古代ローマ人に賞味され，皇帝の晩餐の卓には欠かせないものだったといわれる。

フラミンゴの分布域はかなり広く，ユーラシア大陸西南部，アフリカ，西インド諸島，南アメリカで見られる。しかし，分布域内のどこにでもいるわけではなく，そのコロニーはヨーロッパでいくつ，アフリカ全体でいくつと数えられるぐらいの数にすぎない。よく知られているコロニーとしては，ケープベルデ諸島，ガダルキビル川（スペイン）河口，カマルグ，チュニス，ペルシャ湾，インド西部，カスピ海周辺，キルギスの草原の塩水湖などのものがあげられる。このほか，アジア大陸やアフリカ大陸にいくつかの繁殖地のあることがわかっており，また，西インド諸島や南アメリカにもコロニーがある。しかし，



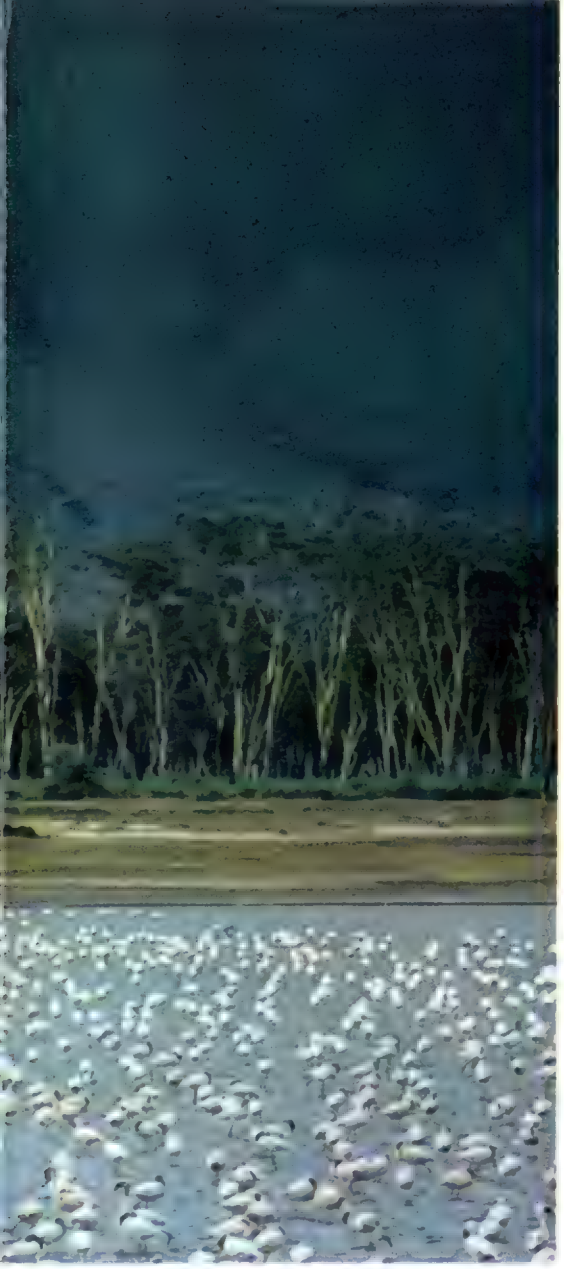
フラミンゴは巨大なコロニーで繁殖する。
ひなたちはまもなく
自分たちだけの群れをつくるようになるが
えさはちゃんとそれぞれの親鳥が与える。
フラミンゴ科フラミンゴ属。

PH. J. BURTON–BRUCE COLEMAN LTD.











むかしたくさんいたエジプトからは姿を消してしまったようだし，西インド諸島のコロニーも絶滅の危機に瀕している。なお，ヨーロッパや北アフリカのあちこちでときたまフラミンゴを見かけることがあるが，これは渡り鳥か迷鳥である。といっても，この鳥は厳密な意味では渡り鳥ではなく，雨が少なくて潟湖が干あがったり，えさが少なくなったりすると移動しはじめるのである。南フランスのカマルグのコロニーでは，繁殖する鳥の約3分の1はほとんど移動しないが，他のものはペルシャ湾や紅海の沿岸，アフリカなどに去って越冬する。カマルグにすんでいるフラミンゴの数は3000～4000羽といわれるが，この数字は当然，一定したものでなく，時期によって急にふえたり減ったりしているのである。

濾化式採餌法

フラミンゴのすみ場所は海に近い塩水湖や潟湖，内陸の塩分やアルカリを含んだ湖沼に限られるが，これはこの鳥の食性や特殊な採餌法と緊密に結びついている。フラミンゴのえさは，水面や水中に浮遊するプランクトン――緑藻類や硅藻類，微小な貝類や甲殻類，昆虫類など――が中心だが，これらは塩分やアルカリを含んだ湖沼に大量発生し，大群のフラミンゴの生活を可能にするのである。えさをとるとき，フラミンゴは水中をゆっくり歩き，ときどき水のなかに頭を突っこんで，上のくちばしを水底につける。そして，くちばしで水底をさらうようにしながら舌をピストンのように前後に動かしてどろ水を口中に出し入れし，くちばしの両側についている櫛歯でプランクトンをふるいわけて食べる。このような，いわば濾化式の特殊な採餌方法は，他の鳥類には例を見ることができない。

フラミンゴは群生する鳥で，ときには何万羽という群れをつくる。性質は極端に臆病で，いついかなるときでも人間の姿を見るとすぐ逃げだす。仲間の1羽が危険を知らせただけで，水中を探っていたフラミンゴたちもいっせいに長いくびを立て，ガンの鳴き声に似たしわがれ声をあげながら，心配そうに列をなして逃げはじめる。その歩みはだんだん速くなり，やがてくびを前にのばして飛びたつのである。

このとき，そこには実に感動的な光景が現出する。まるで花園の花がいっせいに開くように，大きな赤いつばさがひろげられ，空飛ぶじゅうたんのように空中に舞いあがるのである。フラミンゴは一見かぼそいように見えるが，その飛翔力はきわめて強く，長いくびとあしを前後にまっすぐのばし，時速60キロにもおよぶスピードで飛び去る。しかも，非常に高く舞いあがって，いずこともなく消えさってしまう。そして，このことが，フラミンゴの移動の経路をたどることを困難にしている原因のひとつでもある。

コロニーにひしめく盛土の巣

地面や水面をピンク色に染めてひしめきあうフラミンゴの大群――繁殖地におけるコロニーの光景も，人の心をとらえてはなさない感動的な光景である。インドでは人気のない砂州や砂浜に10万以上の巣がところ狭しとつくられた巨大なコロニーが見つかったこともある。しかし，このような大きなコロニーは，



コフラミンゴ　フラミンゴ科コフラミンゴ属。からだはフラミンゴより小さく1メートル以上になることはないが個体数はフラミンゴ類のなかでもっとも多いタンザニアの大口湖にて。（左上）
PH. J. SIX

フラミンゴは口に含んで運んできたどろを円錐形に盛りあげて巣をつくる。1巣1個の貴重な卵は雌雄交替でひと月もだいじに暖められる（左下）
PH. J.-L.S. DUBOIS/JACANA

いっせいに舞いたったフラミンゴの大群（上）
風変りなフラミンゴのえさとり。くちばしを水底につけるようにしてどろ水を口のなかにすくいプランクトンを残して食べるのだ（下）
PH. BEL/VIENNE/JACANA（上）　撮影・高成元（下）



さまざまの保護を加えているにもかかわらず，現在だんだん減ってきている。というのは，この鳥は臆病で，文明の進出に決してなれないし，観光客などが訪れるようになると，どんどん遠くへ逃げていってしまうからである。

巣は，どろを底50センチ，高さ30センチぐらいの円錐形に盛りあげたものである。フラミンゴは柔らかいどろを口に含んで運んできては吐きだす。すると，そのどろは比較的早く固まって巣の形になるのである。巣づくりはおもに雌の役目だが，雄も手伝う。巣の頂上は少しくぼんでいて，そこに長型の白い卵が1個だけ産みおとされる。抱卵(ほうらん)は雌雄交替で行なわれ，28～32日間続く。なお，長い間，フラミンゴはどろの巣に馬乗りになり，長いあしを下にたらしたまま抱卵するといわれてきたが，実際は，両あしをからだの下に折り曲げて巣にすわる

かえったばかりのひなは，白いうぶ毛（幼綿羽）に包まれており，まもなく多少ピンク色がかった綿羽に変わる。くちばしは，生まれたときはまっすぐだが，3週間ほどすると内側に曲がりはじめ，やがてフラミンゴ特有の形に変わる。ひなは，はじめのうちは巣のなかにいて，両親からかゆ状の流動食をくちばしのなかに流しこんでもらうが，3，4日もすれば巣立ちする。その後1週間くらいは巣の付近にいるが，やがて巣を離れて自由に動きまわり，ひなだけの群れをつくって暮らすようになる。このころのひなは，もう歩くのは速く，泳ぐのも非常にうまい。成長はかなり早く，成鳥の監視を受けながらも，水底のえさを捜すことをすぐおぼえる。しかし，まだ完全に独立して暮らすわけではなく，えさの大部分は依然として両親からもらう。飛べるようになるのは意外におそく，生後70～80日のことで，これを待ってはじめて完全に独立することができるのである。この間，何千，何万というひなの群れから両親がどうやって自分たちのひなを捜しだしてえさを与えるのか――一説によれば，おたがいの声の認知によるともいうが，いずれにせよ，実に不思議なことである。

現在，世界のフラミンゴ類はふつう3属4種に分類されている。今まで述べてきたのはもっとも分布の広い種で，新旧両大陸にすんでいるが，このほかアフリカからインド西北部まで分布する**コフラミンゴ** *Phoeniconais minor*（コフラミンゴ属），南アメリカのアンデス山脈の高山湖で繁殖する**アンデスフラミンゴ** *Phoenicoparrus andinus*（アンデスフラミンゴ属）および**コバシフラミンゴ** *P. jamesi*（同)がある。コフラミンゴはもっとも小型の種で，全長1メートル以上になることはないが，10万つがい以上という大きなコロニーをつくることで名高い。

湖に浮かぶピンクの花園？
青い水面を埋めつくし
ひしめきあうフラミンゴの大群
ケニアのナクル湖にて
PH. D. B. J. BARTLETT BRUCE COLEMAN LTD.

つくねんと浅瀬にたたずむアオサギ。
くびをS字形に縮め
片あしで立っていることも多い
サギ科アオサギ属。(右)
PH. A. FATRAS

サギ科　*Ardeidae*

日本ではサギといえばハクチョウやツルなどとともに白い鳥の代表と考えられ，清純無垢な白を表わす代名詞ともなっている。しかし，サギ科の鳥のすべてが白いわけではなく，むしろ全身が白い種のほうが例外的存在だといっていい。サギ科の鳥に共通する特徴としては，以下のようなものがあげられる。

- ●くちばしは長く，ほとんどまっすぐである。これは魚食型の食性に見合ったものと思われる。
- ●くびは一般に長く，多少ともS字形に保っていることが多い。このため，えさをとるときは急にくびをのばして一瞬のうちに獲物を捕えることができ，飛んでいるときはくびを伸縮して重心をとることもできる。
- ●胸や腰に粉綿羽をそなえている。この羽毛は非常に細く，一生抜けかわることなく絶えずのび続けていて，その先端はすり切れると細かい角質の粉末となる。この粉末は水をよくはじくので，付近の羽毛（うもう）について羽毛に耐水性を与え，また羽毛がどろや魚の血でよごれるのを防ぐ。
- ●中趾のつめの側面に櫛歯状の刻みがついている。この刻みのついたつめは粉綿羽の粉末をからだにこすりつけるのに役だつという学者もいるが，確かなことはわからない。
- ●後趾は他のゆびと同じ高さのところについている。

この科には全長約35センチのものから150センチぐらいのものまで63種があり，ほとんど全世界に分布している。ただし，極地と砂漠にはいない。一般にコロニーでつがいごとに巣をつくって繁殖し，卵はふつう雌雄交替で抱く。

アオサギ　*Ardea cinera*

アオサギ（アオサギ属）は日本で見られるサギ類のうち最大の種で，全長約90センチ，つばさの開張1.7メートル前後，体重1.5～2キロもある。からだの背面はその名のとおり青灰色で，くびと頭，腹は白く，前頸（ぜんけい）の中央に黒いすじがある。まゆは黒く，その羽毛が後ろに長くのびて，後頭の飾り羽となっている。また，肩とくびの羽毛も長く，みの状の飾り羽を形成している。

この鳥はヨーロッパから日本まで，寒帯を除くユーラシア大陸の大部分に分布し，また，アフリカの各地にも生息している。冬の寒い地方で繁殖するものは渡りをするが，温帯や熱帯地方では留鳥（りゅうちょう）か漂鳥となっている。日本では北海道，本州，四国で繁殖し，一般には留鳥だが，北海道や本州北部で繁殖するものの一部は冬になると暖かい





地方に移動する。日中は海岸，湖沼付近，川岸，水田など，あまり深くない水中や水辺で過ごし，夜になると森のなかの樹上で眠る。

食性は完全な動物食である。とりわけ20センチ程度までの魚類を好むが，このほか，カエル，オタマジャクシ，ヘビ，鳥のひな，野ネズミ，水生昆虫類，カタツムリ，ミミズなど，さまざまなものを食べる。えさをとるときは，じっと獲物が出てくるのを待ち受けることも，ゆっくり歩きながら捜すこともある。ふつうは，S字形に曲げたくびを獲物目がけて勢いよく突きだし，長く鋭いくちばしにはさんで捕えるが，カエルなどはまずくし刺しにして捕え，それを空中に放りあげ，巧みにくわえなおして，頭からのみこむ。

適者生存的集団繁殖

一般にサギの仲間はコロニーをつくって繁殖する。アオサギの場合もその例にもれず，繁殖期になると群生し，自分たちだけか，他のサギ類（とくにゴイサギやシラサギ類）とともに樹上に営巣する。このコロニーにはふつう100以上の巣があり，サギたちの鳴き声で非常に騒々しい。アオサギの声は「クァー，クァー」という鋭い不協和音で，とくに飛んでいるときによく鳴く。また，巣の近くでは「クワッ，クワッ」という声をたてる。この声は仲間を呼んだり，それに答えたり，恐怖や威嚇を表わすなど，それぞれ，意味があるらしい。

巣はふつう高い木のてっぺんにある。これは，この鳥のからだが大きいため，巣むらのなかでは飛びたつのに不自由だからである。1本の木に何つがいものアオサギが営巣することも少なくない。しかし，あたりに高い木がなければ，低い木でも巣をかけるし，アシのなかや地面に営巣することもある。巣はかなり大きく，直径1メートル以上，厚さ50センチもある。巣の底はしっかりした木の枝で組まれ，その上に小枝がおかれる。産座にはふつう木の根やかわいた草など，柔らかいものが敷いてある。この巣は新しい材料をつけ足して補強しながら何年も使われる。このため，古い巣ほど大きい。悪天候などで以前の巣がこわれたりした場合には新しくつくりなおすが，他の鳥に巣を盗まれてつくりなおすこともある。使われていないサギ類の巣にはよくノスリやフクロウ類が産卵するし，カラスやスズメが営巣することも多いからである。また，カラスはアオサギの巣からえさをかすめとることも珍しくない。

アオサギのつがいは3月末ごろにコロニーに姿を現わす。できるだけ前年の巣を補修して使うが，そうもいかない場合には，雄が別の場所を選び，そこに雌雄で新しく巣をつくる。雄が巣材を運び，雌が組み立てるのである。1腹の卵数はふつう4個だが，3個や5個のときもある。卵殻の色は青緑色である。卵は2，3日おきに1個ずつ産まれ，最初の産卵と同時に，抱卵が始められる。これは雌雄交替（6時間ぐらいごと）で行なわれ，ふつう26日でひながかえる。ひなは灰色の幼綿羽に包まれており，乱れ髪のような奇妙な冠羽がある。卵は産卵された順に一定の間隔をおいて孵化するので，最初に生まれたひなは，最後に生まれたものよりずっと大きい。このため，親鳥がえさを運んできても，大きくたくましいひながそれを奪ってしまい，小さく弱いひなが飢え死にすることも珍しくない。また，幼鳥たちは巣を出て枝の上を歩きまわれるようになると，すべったり，落ちたりして死んでしまうこともある。これらの場合，親鳥はあえて助けようとはしない。しかし，だからといって，かれらが親として失格だとはいえない。かれらはひなを養うえさが足りなければ，ときには20キロも先までえさを捜しにいくほどである。一般に食肉鳥においてはあとから生まれたひながうまく育つことは少ない。種族維持の立場から見れば，すべてのひなが無事に育ち，個体数が急激にふえることは，食物の量との兼ねあいのうえで，むしろマイナスなのである。

ひなは生後6，7週間ではじめて飛びはじめる。さらに15日ほどたつと相当な距離を移動できるようになり，コロニーを離れていく。

すべてのサギ類のうち，アオサギは近年の環境破壊の影響をもっとも強く受けている。というのは，この鳥はからだが大きく，えさを多く必要とするため，環境破壊は食料の減少としててきめんに響くからである。最近ヨーロッパ各地のコロニーで成鳥の雄と若鳥の雌からなるつがいが見つかったとの報告があいついでいる。このような変則的な組合せは以前はなかったものである。これは，アオサギの個体数の激減によって，いままで繁殖しなかった，あるいはできなかった若い雌も雄と営巣する場所を見つけられるようになったためらしい。ここにも，アオサギの置かれている情況が象徴されているといえるだろう。

ムラサキサギ *Ardea purpurea* は
アオサギと同じサギ科アオサギ属の鳥。
ユーラシア大陸の南部とアフリカの一部にすむ。
アオサギよりずっと暖かい地方を好み
日本では沖縄以外にはめったにいない。

PH. BILLE



アオサギのひなはたいへんな大食漢。何日かの間隔をおいて孵化するため先に生まれた強いひなが親鳥の運んでくるえさをひとり占めし，食いっぱぐれた他のひなが餓死してしまうことも少なくない。親鳥のほうは，これもわが種族の悲しい宿命(さだめ)とあきらめているのか，この事態を冷静に受けとめ，しいて助けようとはしない。 *PH. E. HOSKING*



サンカノゴイ（サギ科サンカノゴイ属）の繁殖習性については，学者のあいだで一夫多妻説と一夫一婦説とに意見が分かれている。いずれにせよ，雌がひとりで抱卵し，ひとりで育雛することに変わりはない。ただし，雄は巣の近くにいるし，育雛を手伝うこともあるらしい。 *PH. E. HOSKING*



サギ類の多くは浅瀬を注意深く歩きまわり，魚やカエルなどの獲物を見つけると，曲げていた長いくびをバネじかけのように急にのばして，すばやく捕える。この写真のヒメアカクロサギ *Floride caerulea*（サギ科ヒメアカクロサギ属）もそのごたぶんにもれない。アメリカ合衆国の南部から南アメリカにかけて分布している。 *PH. A. KERN*



アマサギ（サギ科アマサギ属）はここ50年ほどのあいだに急速に分布を広げた鳥で，今では世界じゅうでお目にかかることができる。しかし，もとはといえばアフリカやアジア南部にすむ留鳥。ことにアフリカの乾燥地帯ではウシやスイギュウ，サイなどのそばに群らがっていることが多い。それというのも，この鳥はウシなどのからだに巣くう寄生虫が好物だからである。また，ウシが動きまわると，驚いたバッタなどの昆虫があわてて跳びだしてくるので，労せずしてえさにありつくこともできる。他の地域でも，ふつうのサギ類とは異なり，水にはいるのをあまり好まず，草原などにいることが多い。 PH.A.MARGIOCOO



アマサギ　*Bubulcus ibis*

アマサギ(アマサギ属)は全長約50センチ、いわゆるシラサギの仲間のひとつで、ふだんは全身まっ白い。しかし、繁殖期になると、頭やくび、肩の飾り羽などが亜麻色（キツネ色）を帯びる。アマサギの名はここからきたものである。

この鳥はもともとアフリカとアジア南部にすむ留鳥である。しかし、過去50年ほどの間に自然状態で急速に分布域をひろげ、現在では世界の全大陸にわたって見かけることができるほどになった。ある動物がそれまでの分布域をひろげていくことは決して珍しい現象ではないが、アマサギほど大規模かつ急速に広まった例は少ない。たとえば南アメリカでは、1880年ごろにはじめて観察され、しかもその数はまだいたって少なかった。ところが1940年代になると急に各地で観察報告がふえ、さらに1953年には北アメリカではじめて繁殖するようになった。その後も分布域は広まる一方で、現在ではいくつかのコロニーが大西洋岸の地方に確立されている。また、オーストラリアでは1948年ごろはじめて記録され、その後、人為的に輸入されたものも含め、完全に土着化するようになった。ヨーロッパではもともとスペイン南部にしか見られなかったが、現在ではやはり北方に広まりつつある。日本で見られるようになったのがいつごろのことかは定かでないが、一般に夏鳥として5月ごろ南方から渡来し、本州の各地で集団繁殖する。

主食は昆虫類

エジプトのナイル河畔は古くからアマサギの生息地として知られ、他のサギ類と仲よく村落の近くに営巣していることが多い。かれらは人間を恐れないし、現地人のほうもこの鳥をいじめたりはしない。イヌでさえ、この鳥を庭や畑で見かけてもとびかかったりしないという。また、この地方の草原や砂漠では、アマサギが大きな草食動物（とくにウシやスイギュウ）のそばに群れているのどかな光景もよく見られる。アマサギは動きまわる動物たちのあとについていく。すると、アマサギの好物のイナゴやバッタが前をいく動物たちの動きに驚いてとびだしてくるため、労せずしてえさにありつくことができるのである。また、動物たちがじっとしているときは、アマサギはその腹の下にもぐりこんだり、背中に乗っかったりして、動物たちにたかるダニやアブなどを食べたりもする。ある記録によれば、スーダンで1頭のゾウの背中に20羽、スイギュウに8～10羽のアマサギが乗っていたという。日本でもときには、ウシのまわりに群れていることがある。

えさとしては、昆虫類のほか、魚類、小ネズミ、カエルなども食べる。しかし、他のサギ類と異なり、水辺をあまり好まず、草地で採食する傾向が強い。したがって、主食はやはり昆虫類である。アマサギは獲物を見つけるとじっと立ちどまり、くびを左右に振りはじめる。やがてこの揺れがだんだん激しくなり、ついには全身が軽く震えだす。と思うと、次の瞬間、ぱっとくびをのばし、目にもとまらぬ早わざで獲物を捕えてしまう。この間、ものの5秒もかからない。

繁殖期は、エジプトではナイル川が氾濫しだすのと同時に始まる。スーダンの東部ではもう少し早い。巣は一般に水辺に近い灌木の茂みにつくられるが、ぽつんと立ったミモザの木の上にあることもある。この巣は小さな枝を粗雑に組み合わせただけのものである。

日本での繁殖期は5月中旬～6月。1腹の卵数は3～5個で、卵の色は緑青色をしている。雌雄交替で21～24日間抱卵する。ふつうコサギやゴイサギのコロニーなどに混じって営巣するが、その数は比較的少ない。

冠羽をさか立てたアマサギの親子.
巣は木の小枝を組みあわせただけの簡単なもの.
他のサギ類と同じく
沼沢地の近辺にコロニーをつくり
樹上に営巣して繁殖する.

PH. BEL-VIENNE-JACANA







コサギ　*Egretta garzetta*

日本ではサギというと全身白色のものを想定する人が多く，これらを一般にシラサギと呼んでいる。さきに述べたアマサギもこれに含めることができるが，日本でふつうに繁殖するものとしては，コサギ，ダイサギ，チュウサギの3種をあげることができる。この3種はいずれもコサギ属に属し，姿や習性もたがいによく似ている。

コサギは，その名のとおりもっとも小さな種で，全長約54センチ，体重500グラムほどである。羽色は全身白色だが，くちばしとあしは黒く，ゆびが黄色い。繁殖期のコサギでは，後頭部に数本の細長い冠羽（かんう）がはえ，また，背と胸にも長い飾り羽がある。

コサギの分布域はユーラシア大陸の温帯および熱帯地方，アフリカ，マダガスカル，インドネシア，オーストラリアである。日本では本州と四国にふつうに繁殖し，一般に留鳥だが，一部は本州中部以南の暖かい地方に移動する。フランスや中部ヨーロッパのコサギ

ダイサギの一家。サギ科コサギ属。
枯れ枝を組みあわせてつくったじょうぶな巣は
風雨に耐えて翌年まで残り
再び使われることも少なくない。（上左）

撮影　[illegible]田哲夫





はアフリカで越冬する。

群れで生活する性質が強く，ふだん数羽から数十羽の小群で水田，湖岸，沼沢地，干潟，入り江などの浅い水中でえさをあさっている。かつて西日本の田園地帯では，広々とした緑の水田に純白のコサギが点々とちらばる光景は，初夏の風物詩として，ごくふつうに見られたものである。

食性は完全な動物食である。とくに小型の魚類を好むが，そのほかにもカエル，オタマジャクシ，水生昆虫，ミミズなどを食べる。えさのとり方はアマサギと同じで，S字形に曲げたくびを急にのばして，あっというまに獲物をしとめる。

繁殖期になると，たくさんのつがいが集まって林やタケやぶのなかにコロニーをつくって営巣する。日本では，ほとんどのサギのコロニーはコサギ，チュウサギ，ゴイサギが主体となった混生コロニーで，珍しくはないがずっと数の少ないアオサギ，ダイサギ，アマサギが加わっていることも多い。このコロニーは数百羽から，ときには数万羽のサギが群れており，関東地方ではこれを"サギ山"と呼びならわしている。埼玉県浦和市の野田のサギ山は特別天然記念物に指定されており，このほか，山口県の岩国，青森県の猿賀が，サギの繁殖地として名高く，天然記念物の指定地域となっている。

繁殖はふつう4月末から5月はじめに始まる。巣は多くのサギ類と同様，木やタケの上に小枝を積みかさねてつくり，ここに緑青色の卵を4，5個産卵する。卵は1，2日の間隔をおいて産み落とされるが，抱卵は最初の産卵と同時に始められる。雌雄交替で抱卵し，その期間は21～25日にわたる。

動物学者たちにとって，サギの繁殖習性を観察するのはかなり忍耐を要する。コロニーには耳をろうするような騒々しい鳴き声が満ちており，しかも，あたり一面に排出物や腐った卵，食べ残しのえさなどの異様なにおいが立ちこめているからである。そのうえ，近くの沼地からやってくるカがいっぱいに群れて，観察者を悩ませる。しかし，この鳥自身の優雅さ，汚れのない白さは，これを補って余りあるものだろう。

生まれたばかりのひなは白い幼綿羽に包まれている。あしとくちばしはバラ色だが，まもなく灰青色に変わる。しかし，成鳥と同じように黒くなるのは，独立するようになってからのことである。親鳥たちは，雌雄交替でたびたびえさを運んでやる。ひなは生後3週間ほどすると，入り組んだ枝のなかを歩きはじめる。5週間後には親鳥たちといっしょに飛びまわれるようになるが，まだ，夜は巣に帰って眠る。8月にはいると繁殖は完了し，いつのまにか付近の水田にちらばっていく。アオサギなどの場合と同様，親鳥はえさを運ぶ以外にはあまりひなの世話をしないので，ひなの孵化率，巣立ち率はかなり悪い。

同じコサギ属の**ダイサギ** *E. alba* と**チュウサギ** *E. intermedia* はコサギによく似ているが，からだの大きさの違いで識別できる。名まえが示すように，ダイサギがいちばん大きく，チュウサギがこれに次ぎ，コサギがいちばん小さい。また，ダイサギとチュウサギは

羽づくろいに余念のないコサギ。サギ科コサギ属。
その純白の飾り羽は
無垢を装おおうとする女性たちの垂涎の的。
かつて，何百万，何千万という鳥が
彼女たちのおしゃれの犠牲となった。（左下）
PH. A. J. DEANE BRUCE COLEMAN LTD.

コサギやチュウサギは
いっしょにコロニーをつくることが多い。
関東地方ではこのコロニーを"サギ山"と呼ぶ。
写真はありし日の野田のサギ山の光景（1965年）。
現在は壊滅状態にある。（上中）
撮影　行田哲夫

チュウサギの親子。サギ科コサギ属。
ひなの成長は早く，ひと月もすれば
からだの大きさだけは一人まえに近くなる。
この写真のひなも，図体はでかいが
まだ親のスネをかじっているようだ。（上右）
撮影　行田哲夫



繁殖期でも冠羽がなく，ゆびが黒い（コサギの場合は黄色）。

ダイサギは全長90センチ近くもある。分布が広く，北緯50度以南の新旧両世界のほぼ全域にすんでいる。

チュウサギは全長70センチ前後，アジア南部とインドネシアに分布する。日本には夏鳥として４月ごろ渡来し，９月の終りには南方へ去ってしまう。繁殖期にはシラサギ３種のなかでもっとも多く見られる。

シラサギ類はその美しい飾り羽のため，羽毛採集業者の手で数多く捕獲され，一時は非常に数が少なくなった。そこで1930年ごろからアメリカ合衆国，イギリスなどに保護団体が結成され，その猛運動の結果，各種の保護措置がとられるようになり，再びふつうに見られるようになった。しかし，最近また工業化や宅地化によって繁殖地や採食地がせばめられ，農薬禍などともあいまって，しだいに少なくなりつつある。

クロサギ　*Egretta sacra*

すでに述べたとおり，コサギ属の鳥といえば日本ではコサギ，チュウサギ，ダイサギなど全身白色のものが多い。ところが，なかにはこれとまったく逆に全身黒っぽい色をしたものもある。クロサギもそのひとつで，全長約60センチ，コサギよりやや大きい程度だが，あしはコサギより短く，くちばしもコサギよりじょうぶである。頭上には細長い冠羽があり，胸や肩にも飾り羽があるが，コサギなどと違ってあまり目だたない。アジアの南部，南太平洋の島々，オーストラリアなどに分布し，日本では南日本，伊豆七島，沖縄の岩棚や岩礁で繁殖するものがある。しかし，日本での個体数はごく少なく，ときたま1，2羽がひっそり動きまわっているのを見かける程度にすぎない。

日本でふつうに見られるサギ類と異なり，クロサギはもっぱら海岸の岩場だけをすみかとしている（ただし，世界的に見れば，海岸だけで暮らすサギは珍しくはない）。たいていは岩のあいだの水たまりでえさをあさっており，ときおりゆるやかに羽ばたきながら岩から岩へ飛び移ったりする。えさは小型の魚類や貝類，エビ，カニといった甲殻類など，水中にすむ小動物が主体となっている。獲物のとり方は他のサギ類と同じで，水辺や浅瀬でじっと待ち受けたり，水中をゆっくり歩きまわったりしながら捕える。

クロサギはその名が示すように黒っぽい色をしているのがふつうである。ところが，沖縄などではコサギなどによく似た全身白色のクロサギを見かけることがある。"白いクロサギ" といえば奇妙に聞こえるが，熱帯地方では必ずしも珍しい存在ではない。ただし，温帯地方ではほとんど見られないらしい。また，南太平洋のフィジー諸島，ソロモン諸島，ミクロネシアなどでは白と黒のまだらのものも見かけられる。

クロサギ　サギ科コサギ属。
コサギやチュウサギと近縁なのに
黒っぽい羽毛をもち
海岸の岩礁だけで生活する変り者だ
ただし，白いものもいる。

撮影　[illegible]



ゴイサギ　*Nycticorax nycticorax*

サギといえば日中に水辺でえさをあさっている姿を想像しやすいが、数多いサギ類のなかには夜行性のものもいくつかある。ゴイサギ（ゴイサギ属）もそのひとつで、繁殖期以外、昼間は林のなかで休んでおり、日暮れから夜明けにかけて沼沢地でえさをあさる。この鳥の学名 *Nycticorax* は"夜のカラス"という意味だが、その名のとおり、この鳥のすみかの近辺では夜になると「クァッ、クァッ」というカラスに似た鳴き声をだしながら飛びまわる姿が見られる。ついでながら、和名の"五位鷺"は、醍醐天皇が神泉苑の宴席でこの鳥に五位の位を与えたという故事に由来したものである。

全長約60センチ、体重 750 グラム前後、ずんぐりしたからだつきをしており、くちばしは太くて比較的短く、頭上に細くて長い白い羽毛が2、3本あるので、他のサギ類と識別しやすい。頭部と背は緑色がかった黒で、腹は白く、つばさと尾はネズミ色である。目の周囲には青いくまどりがあり、虹彩は赤い。あしは明るい黄色をしている。雌雄は同色だが、幼鳥の羽色は成鳥とまったく異なり、全身褐色の地に白と黄褐色の縦斑や斑点が一面についている。この羽色の若鳥は俗に"ホシゴイ（星五位）"と呼ばれ、成鳥の羽色になるには3年を要する。

ゴイサギの分布域は広く、ヨーロッパ南部、トルコから日本にいたるアジアの温帯および熱帯地方、アフリカ大陸の一部、さらには北アメリカ大陸の南部、中央および南アメリカの全域にすんでいる。熱帯で繁殖するものは留鳥となっているが、冬の寒い地方のものは渡りをする。日本では本州以南の各地の松林やタケやぶで繁殖し、一部は冬になるとフィリピンなどに渡っていく。日本で繁殖するサギ類ではもっともふつうの種である。

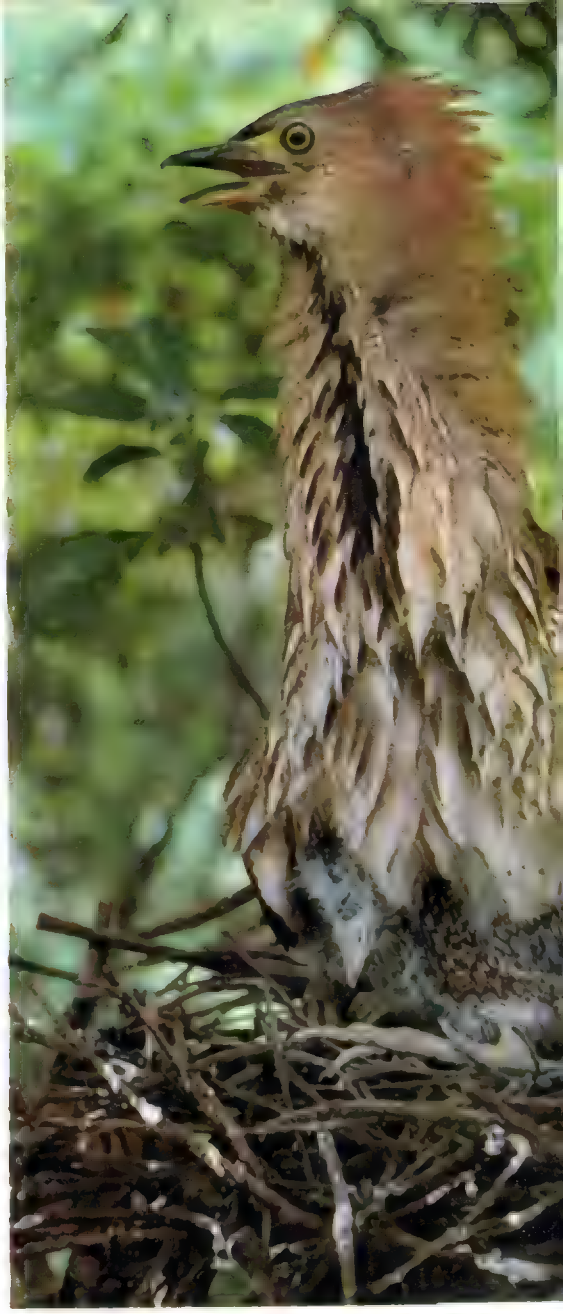
ゴイサギは魚類を主食としており、沼沢地の近辺で見かけることが多い。しかし、ねぐらや巣は木の上につくるため、ふつうは暗い森のなかにすんでおり、不毛の原野の沼地などではまず見られない。山地でも平地でもすみつくが、日本では公園や神社の境内、墓地などをねぐらとしていることが多い。

日没とともに、眠りからさめたゴイサギは群れをなし、ときどき鳴きながら採食地へ飛んでいく。飛び方はかなり速く、羽毛が柔らかいため、羽ばたきはほとんど聞こえない。川や池、養魚場などの採食地では、かれらは決して鳴き声をたてない。えさのとり方は他のサギ類と同じだが、歩き方は独特で、歩幅が小さい。地上でも空中でもくびを乙字形に曲げ、肩のあいだに入れているので、くびがないように見える。

繁殖期は5月から7月まで続く。この鳥のコロニーには他のサギ類が入りまじっていることが多い。巣は好んで高い木の梢や枝の分かれめにつくられるが、低い枝にあることも

ゴイサギ　サギ科ゴイサギ属
学名は"夜のカラス"の意
鳴き声がカラスの声に似ているのと
夜行性の習性をもつためにつけられたものだ
夜遊びがたたったわけでもあるまいが，目は赤い
PH. J. BURTON/BRUCE COLEMAN LTD





ないわけではない。また、大きな木がない場合はタケやぶや灌木に営巣することも多い。巣は平らで比較的小さく、小枝を組み合わせてつくる。内部にはなにも敷かないことのほうが多い。1腹の卵数は4個（まれには3または5個）、緑青色の美しい卵で、2日の間隔をおいて産み落とされる。他のサギ類の場合と同様、最初の産卵と同時に抱卵しはじめ、約21日でひながかえる。この抱卵は雌雄が2、3時間交替でするらしい。

孵化したひなはベージュと白の幼綿羽に包まれており、頭には非常に長くもじゃもじゃした羽毛がはえている。生後約1か月で枝の上を歩きまわるようになり、6週間たつと飛び、2か月でほぼひとり立ちする。この期間には両親はふだんと異なり、昼間もえさを捜し、ひなのためにせっせと運んでくる。このため、巣の周辺は卵の殻や食べ残しの魚などがちらばり、異様なにおいが立ちこめている。

白い冠羽の秘密

一般にサギ科の鳥の生態や繁殖習性は、コロニーで比較的容易に観察できるので、よく調べられている。なかでもゴイサギは、飼育によく耐え、人工環境下でもよく繁殖するため、世界の鳥類学者たちにとってかっこうの研究材料となっている。たとえばエジンバラの動物園では、鳥が自由に飛びまわれる大きな禽舎のなかで、かなり多数のゴイサギのコロニーをつくるのに成功している。おまけに、ゴイサギはひなが成鳥になるまでの3年間、羽色の違いで年齢がわかるため、よけいに研究しやすい。したがって、ゴイサギについては、他の《野生の》鳥とはくらべようもないほどに調査がいきとどいており、また調査されつつある。しかし、だからといってゴイサギの行動についての諸家の意見が完全に一致しているわけではない。とくに成鳥の頭上を飾っている糸のように細く長い白色の羽毛の役割については学者たちのあいだで諸説入り乱れている。

繁殖期の間、雄と雌のゴイサギが出合うと、雄は雌に向かって頭とつばさを低く下げ、まるであいさつでもするような動作を行なうが、この“あいさつ行動”の間、雄はこの頭上の白い羽毛をさか立てるのが見られる。しかし、オーストリアの行動学者コンラート・ローレンツ博士によれば、このような“あいさつ行動”は頭上に冠羽のない南アメリカのゴイサギの1種でも観察されたという。そこで博士は、ゴイサギが冠羽をさか立てる行為は、この“あいさつ行動”に付随的なもので、それ自体としては意味のないものだと結論づけている。ところがこれとは反対に、イタリアの鳥類学者S・フルギスによれば、色をつけた脚環を何羽かの鳥につけて個体識別しながら、500羽のつがいからなるコロニーで調査した結果、この細い羽毛のわずかな位置の違いでさまざまの意味が示されることがわかったという。たとえば、この羽毛を心もち立てたときは友情のしるしであり、完全に立てたときは敵対を示しているというのである。

他のサギ類では羽毛の動きはきわめてはっきりした動きをもっている。したがって、このゴイサギの冠羽の動きに情報伝達機能がないとは考えにくい。まだその意味について一致した見解は出ていないが、少なくとも、この羽毛は単に習慣的に動かすものではないということはできるだろう。

ササゴイ　サギ科ササゴイ属
長いくちばしをすばやく突きだし
まんまと昆虫を捕えた瞬間
ふつうは魚を主食としている（上左）

ミゾゴイの親子　サギ科ミゾゴイ属
——ムム、いやな予感がするぞ。用意はいいか？
危険を感じると、くびをまっすぐにのばし
みごとな擬態を演ずることで知られる
ひなも一人まえにやってのける。（上右）



ミゾゴイ *Gorsakius goisagi*

ミゾゴイ（ミゾゴイ属）は夏鳥として４月下旬に日本に渡来し，本州，伊豆七島，九州などの山林中で繁殖する。このサギは日本特産といってよく，日本以外の繁殖地はまだ見つかっていない。冬には一部が南日本で越冬するほか，沖縄，台湾，フィリピンなどに渡っていく。

全長は約50センチ，顔と頭，背は濃い褐色で，胸と腹は黄褐色の地に暗い褐色の縦斑がある。あしは濃い緑色をしている。

習性は孤独性で，つねに単独かつがいで生活し，繁殖期にもコロニーはつくらない。また，暗い林をすみかにして，めったにそこから出ようとしないため，非常に目につきにくい。夜活動することも多いが，ゴイサギと違って夜行性というほどではない。

ミゾゴイはみごとな〝擬態〟をすることで知られている。とくに繁殖期など，ほんの少しでも危険を感じると，あわてて逃げたりせず，巣の上に身を伏せたり，くびをまっすぐにのばし，くちばしを空に向けたりしたまま，じっと静止する。その姿は，じみな羽色ともあいまって，棒か枯れ枝のように見え，とても鳥とは思えない。このような擬態はササゴイやヨシゴイ，サンカノゴイなどにも見られるもので，これによって外敵の目をごまかすわけである。

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis*

ヨシゴイ（ヨシゴイ属）は全長約30センチ，ゴイサギの半分くらいの鳥で，つねにヨシやマコモのくさむらをすみかとしているためこの名がある。頭部は黒く，背面は黄褐色で，腹部はだいたい淡黄褐色をしている。雌は下面に，幼鳥は背に縦斑が多い。アジアの東・南部とインドネシア，フィリピン，南太平洋の島々に分布し，日本にはふつう夏鳥として４，５月ごろ渡来して，北海道，本州，四国，九州で繁殖する。少数のものは南日本で越冬するといわれる。日本各地にいるものの，単独かつがいで暮らし，つねにくさむらに身を潜めているため，飛びたつとき以外は人目につきにくい。巣はヨシやマコモの葉をそのまま重ねてつくることが多い。ミゾゴイと同じく，みごとな擬態をすることで知られる。

同じヨシゴイ属の **オオヨシゴイ** *I. eurythmus* はアジア東北部で繁殖し，冬はアジア南部，フィリピン，インドネシアに渡る。日本には５月上旬に渡来し，北海道と本州で繁殖する。習性はヨシゴイと同様で，ヨシ原に生息，営巣する。数はヨシゴイより少ない。

リュウキュウヨシゴイ *I. cinnamomeus* はアジアの南部，フィリピン，インドネシアに分布するが，日本では琉球列島に留鳥として生息するため，この名がある。習性はヨシゴイと同様で，ヨシ原に生息，営巣する。

ササゴイ *Butorides striata*

ササゴイ（ササゴイ属）はゴイサギを少し小さくしたような感じの鳥で，全長約52センチ，からだつきや羽色はゴイサギに似ている。ただ，つばさの色はゴイサギと違って，背面と同じような青緑色をしており（ゴイサギではネズミ色），頭上の飾り羽も黒っぽい（ゴイサギでは白）。また，くちばしの太さが明らかに違い，ササゴイのほうがずっと細いので，この点に注目すれば容易に見分けられる。なお，幼鳥はゴイサギの場合と同じく，白っぽい縦斑や斑点のある褐色の羽毛をもっており，成鳥とははっきり区別できる。

分布域はかなり広く，アジアの東・南部，アフリカ，インドネシア，オーストラリア，パナマ，南アメリカ全土にまたがっている。日本には夏鳥として４月ごろ渡来し，本州，四国，九州の山林やタケやぶの樹上で繁殖する。この鳥は決して珍しくはないが，つがいか単独でいることが多く，大きなコロニーをつくったり，他のサギ類にまじって繁殖することはないので，観察する機会は少ない。



くさむらに棒杭が１本？
くびをのばしてじっと静止し
敵の目をあざむくオオヨシゴイの擬態
色の淡いほう（左）が雄，濃いほう（右）が雌だ
サギ科ヨシゴイ属。（下２枚）

撮影 水野仲彦（左），竹丸勝朗（右）





サンカノゴイ

Botaurus stellaris

サンカノゴイ（サンカノゴイ属）はヨシゴイによく似た鳥だが，からだはかなり大きく，全長約75センチ，体重1～1.4キロもある。羽色は全体に錆色がかった黄色で，黒褐色の縞や雑多な模様がある。虹彩は黄色く，あしは緑色をしている。

この鳥はヨーロッパから日本（北海道）にいたるユーラシア大陸の温帯と亜寒帯の大部分，およびアフリカの北部と南部で繁殖する。他のサギ類と同様，北のほうのものは渡り鳥で，ヨーロッパの北部や中央部で繁殖するものは南部やアフリカ大陸北部で越冬する。ただし，ヨーロッパ南部やアフリカ南部で繁殖するものは一般に留鳥となっている。すみ場所は沼沢地の近辺で，ヨシゴイなどと同様，ほとんどの場合ヨシ原のなかに営巣する。

ミゾゴイやヨシゴイと同様，サンカノゴイも擬態のうまいことで知られる。ふだん地上にいて何も警戒するものがないときには，長いくびを肩のあいだに沈めており，まるでくびがないように見える。ところが，ほんの少しでも危険を感じると，すっくと立ちあがり，くびをまっすぐのばし，くちばしを空へ一直線に向けたまま，ぴくとも動かなくなる。その姿は，もともと周囲の色にまぎれやすい羽色ともあいまって，ちょうど枯れたヨシの茎のように見え，外敵の目をあざむくことができるのである。

歩き方はゆっくりしていて用心深い。飛び方もクイナのようにゆっくりしている。習性は夜行性で，夜飛んでいる間に，カラスとよく似た「カァー」というしわがれ声を出す。また，繁殖期になると，雄は「ウォー，ウォー」とうなるような鳴き声を響かせる。この声はウシの鳴き声のような低い音で，だいたい5，6回出し，あたりが静まりかえっているときには2，3キロ先まで届く。

多くのサギ類と異なり，サンカノゴイはつねに単独かつがいで暮らしていて，群れをつくることは決してない。外敵が近づくと例の擬態をとるが，相手が弱いと見てとれば見境なしに襲いかかっていく。また，自分より強い相手の場合でも，窮地に追いこまれれば正面からかかっていき，くちばしで相手の目に攻撃を加える。

食性は完全に動物食である。とくに小さな魚やカエル，イモリなどを好み，水中にいる昆虫類とその幼虫もよく食べる。そのほか，機に応じて，鳥のひなやヘビ，小型の哺乳類，ミミズ，軟体動物なども食べる。

繁殖習性については学者のあいだで意見が分かれている。ある学者は，この鳥の巣をいくつも見つけたのに，その近辺では1羽の雄のうなり声しか聞こえなかったということをもとに，一夫多妻説を唱えている。これに対し，ある学者は，雄が雌の抱卵中ずっと巣の近くで見守り，また，育雛（いくすう）を手伝うという点から，一夫一妻説を主張しているのである。

巣はヨシ原のなかの，外敵の近づきにくい場所にある。一般には水の上に何本かの枯れヨシの茎を渡し，その上にヨシやイグサ，木の葉などを重ねてつくる。産座にはかわいた草が敷いてあり，ここに黄褐色の卵が5，6個産み落とされる。抱卵期間は25～26日で，雌だけが行なう。孵化したひなは，その後15日ほどたつと巣立ちし，ヨシのなかを歩きまわるが，飛べるようになるまでにはかなりの日数がかかる。ひなも，何か危険を感じると成鳥と同じようにじっと静止して擬態を演じてみせる。

ヨーロッパヨシゴイ。サギ科ヨシゴイ属。
学名は *Ixobrychus minutus*.
その名のとおり，ヨシゴイのヨーロッパ版で
西アジア，サハラ砂漠以南のアフリカ大陸
オーストラリアの海岸地方にも分布する。（上）
PH. S. CHEVALLIER-JACANA

サンカノゴイ。サギ科サンカノゴイ属。
くびのない，ずんどうの鳥と思ったら大まちがい，
いったんことあれば
肩のあいだに埋ずめていたくびをすっとのばし
みごとな擬態を演じてみせる。（下）
PH. E. HOSKING

日本のサギ類の生活

小杉昭光

ひとくちにサギといっても、その種類は多い。日本ではアオサギ、ムラサキサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、カラシラサギ、アマサギ、クロサギ、アカガシラサギ、ゴイサギ、ササゴイ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、ミゾゴイ、サンカノゴイの15種が記録されているが、ムラサキサギ、アカガシラサギ、カラシラサギは迷鳥なので、ふつうに日本に生息しているものといえば、これを除いた12種ということになる。

これらのサギ類のなかには、コサギやゴイサギのように1年じゅう日本にすんでいる留鳥（りゅうちょう）もいるが、大部分は渡り鳥（夏鳥）で、日本より南の東南アジア各地で越冬し、春から夏にかけて日本各地で繁殖する。したがって、日本におけるかれらの生活は、種族保存のうえで、非常に重要な意味をもっているのである。

サギ類はその繁殖習性のうえから、集団繁殖するものと、そうでないものとに分けられる。集団繁殖するものとしてはアオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギなどがあげられ、いずれも大きな森や林、あるいは竹林に何百、何千、何万と集まって、巣と巣がふれ合いそうになるくらい密集して繁殖している。

日本には北は北海道から南は九州まで各地にこうしたサギの集団繁殖地がいくつもあり、なかでも北海道大楽毛のアオサギ繁殖地、野幌の原生林、埼玉県浦和市の野田のサギ山、千葉県行徳町の新浜御猟場、愛知県知多郡の鵜の森、大阪府の継体天皇御陵、滋賀県の琵琶湖周辺、広島県の厳島神社の裏山などはよく知られている。

この稿では、こうした集団繁殖地で繁殖するサギ類の生活について、徳川中期以来270年余の歴史をもつ野田のサギ山を中心に、関東地方に散在するいくつかの繁殖地で観察してきたことをもとにして、その概略を説明してみよう。

繁殖地への渡り

冬の間日本の温暖な地方や東南アジア各地に分散して冬を過ごしていたサギたちは、春の到来とともにそれぞれの繁殖地へいっせいに移動しはじめる。

イギリスのローアンの研究によれば、春になって日照時間がふえると、それが刺激となって脳下垂体前葉の活動が促され、生殖腺刺激ホルモンの分泌が盛んとなる。このために生殖腺が発達して性ホルモンの分泌がふえ、これによって、鳥は衝動的に北方へ移動を開始するという。したがって、毎年日長の変化が定まっているように、繁殖地に渡来する時期もほぼ定まっている。

野田のサギ山を例にとると、もっとも早く渡来するのがダイサギで、例年3月下旬から4月2日ごろまでに初認され、その後ゴイサギ、さらにコサギ、チュウサギと続き、最後にアマサギが4月下旬から5月上旬にやってくる。

ところで、第1陣のサギたちはまことに慎重で、繁殖地に飛来してきてもすぐには降りたたない。上空を旋回しては飛び去るということを繰り返し、夕刻にやっと20～30羽の1群が高く低く何回か旋回したあと、繁殖地でも、もっとも高いケヤキのような木の梢や、繁殖地の中央の安全そうな場所に舞いおりるのだ。

こうして繁殖地に降りたったサギたちは、翌朝は日の出前にここを飛びたって採食地に出ていくが、夕刻に再び姿を現わし、安全性を確かめるように上空を旋回したあと、昨日と同じように降りたつ。この時期のサギは非常に臆病で、わずかの物音にも驚いて飛びたってしまうので、とくにそっとしておかないと、せっかく渡来してきたのに、ひと晩かふた晩で姿を消してよそにいってしまう。しかも、サギは集合性が強いので、第1陣がそこに落ちついていさえすれば、あとのものは次々とそのまわりに舞いおりてくる。だから、この第1陣をうまく落ちつかせるか否かが、そこが繁殖地となるか否かを決めるひとつの重要なカギとなっている。



ダイサギはまとまって巣をつくる傾向がある　撮影　筆者

さて、こうして無事に数日たち、サギたちが落ちついてくると、昼間もこの繁殖地の樹上にとどまっている姿が見られるようになる。こうなるとまもなく配偶関係が定まり、いよいよ巣づくりが始まる。

巣づくり

サギの巣は樹枝上に枯れ枝を組みあわせた浅いさら状のたいへん粗雑なものだが、その直径は50～60センチ、厚みは20～30センチほどもある。

巣づくりは雌雄分業で行なわれる。雄が巣材を集め、雌はサギ山の樹上にとどまって巣づくりの場所を他のサギから守り、雄のくわえてきた枯れ枝をじょうずに組みあわせていくのである。

巣をつくる場所はきわめて多そうに思えるが、条件のよいところは限られているとみえて、巣づくりの場所をめぐる争いはこの時期になると随所で見かけられる。しかし、意気込みの差なのか、だいたい先着者がいつも勝っているようである。わたしは、樹木を1本1本写真にとり、正確に巣の位置を記録しておいて、翌年どこに巣をかけるかあたってみたことがあるが、それによれば、17本の木で198巣のうち121巣、約61.1パーセントのものが前年と同じ場所にあった。

巣材は枯れ枝が中心だが、ときには農家のわらぶき屋根から引きぬいてきたわらや、子どもの置き忘れた釣りざおが加わったりする。雄はこうした材料をくちばしにくわえて運ぶが、飛翔しながら誤って落としてしまうこともある。おもしろいことに、雄はそのようなときでも決して拾うということはせず、そのまままっすぐ巣のところへもどってくる。ふつうはここでくわえてきた巣材を雌にくちばしで渡すのだが、この場合はくわえているものがないので、雌は雄のくちばしをくわえてぐいと引く。すると、雄は再び巣材をとりに飛びたっていくのである。トゲウオの産卵習性ではないが、鳥の巣づくりも複雑な反射運動の組みあわせとなっているのではないだろうか。

巣をかける木の種類はとくに定まってはいない。しかし、早い時期でまだ落葉樹の芽がのびださないうちは常緑樹を選ぶ傾向が強かった。また、野田のサギ山のようにいくつかの種類が混在しているサギ山では、種ごとに集合して巣をかける傾向が見られる。これはまだ木の芽ののびない早い時期ほどはっきりしていて、木の芽がのびて他のサギの姿がそれほどよく見えなくなり、1本の木に多くの巣がつくられるようになると、個々の巣のテリトリー（なわ張り）が小さいこともあって、多少乱れてくる。しかし、ゴイサギが巣をかけはじめた木には次々とゴイサギの巣がつくられ、他のサギはほとんどはいりこめないし、一方、ダイサギのようなシラサギが巣をつくりだしたところは、どうもシラサギの巣が多くつくられ、一種のすみわけ現象が見られる。ただし、これも竹林のような場合にはそれほどはっきりはしていないようである。

1本の木のうちでは、上方の枝の梢ほど条件のよい場所で、下枝に移るほど条件が悪いらしく、先着順に早いものほど中央の梢に巣をかけ、おそくなるにしたがって下枝に移り、周辺部に移動していく。これは繁殖地全体から見ても同様で、早いものほど人の近寄りにくい安全な地域、高い木のはえている場所を選び、あとになるほど周辺部へひろがっていく傾向が見られる。

産卵・育雛

渡り鳥の生活は、秋までにひなを育て渡りをして長途の移動ができるまでにしなければならないので、まことにあわただしい。そこで、まだ巣が完成しないうちに卵を産み、抱卵（ほうらん）しながら巣を補修し完成させていく。

卵はどの種でも青緑色無斑で、卵だけでは種別の判定はできないくらいよく似ている。ふつう1巣に3～5卵を産むが、第1卵が産みだされるとすぐ親鳥は抱卵しはじめ、雌雄交替で24～25日も抱くとひながかえる。

ひなははじめ赤裸で、まことにみじめな形をしている。しかし、親鳥が両翼で囲うようにしながら胸の下で暖めているうちに羽毛（うもう）ものび、親が自分の胃から、半ば消化したえさを吐きだして与えているうちにからだも大きくなって、2週間もすると一方の親だけでは給餌がまにあわなくなり、両親そろってえさ運びに追われるようになる。

＊





続・鳥の世界 もうひとつの見方

浦本昌紀

2 例外多い「秋は南へ，春は北」

渡り鳥とは、繁殖分布域と非繁殖分布域とが遠く離れていて、その種の個体すべてが、年に2回、そのあいだを大移動する鳥をいうわけですが、ふたつの分布域が一部または全部重なっていて、一部の地域に生息する個体しか年2回の長距離移動をしない、という鳥もあります。

つまり、同種でありながら、ある地域の個体は渡り鳥だが、別の地域の個体は留鳥だ、というわけです。このようなタイプの移動をする種は「部分的渡り鳥」と呼ばれます。

同じ繁殖地の同種の鳥でも、個体によって移動するものとしないものとがある

しかし、実は「部分的渡り鳥」と呼ばれているものが、もうひとつ別にあるのです。

それは、同じ地域で繁殖する同種の鳥にもかかわらず、一部の個体は移動するが、一部はそのままとどまる、という場合なのです。

たとえば本号の本文に扱われているゴイサギですが、日本では1年じゅう見られるけれど、日本で生まれたゴイサギに脚環(あしわ)をつけて調べたところ、非繁殖期にフィリピンで回収されたケースがいくつもありました。その結果、日本のゴイサギは、一部が渡りをするが、一部はしないということがわかったわけです。

そこで、日本のゴイサギの非繁殖分布域は、繁殖分布域をすべて含みながら、それより南へひろがっていることになります。当然フィリピンで繁殖しているものもありますから、種の分布域を調査しただけでは、このことはわかりません。

日本のゴイサギのような例は、かなりたくさんの鳥にあるのです。羽色に明らかな地域差があるとか、あるいは、かなりの個体が移動しているとかでないかぎり、脚環調査でないと、このような実態までは明らかにならないのです。

脚環をつけずに実態がいくらかわかった例として、ヒヨドリがあります。日本では全国に1年じゅう見られますが、冬になると北海道（東北地方でも？）では個体数が非常に減ってしまうのです。その大部分が移動してしまうことは明らかです。一方、南日本では、冬になると北海道産と思われる淡色のヒヨドリが見られます。そのうえ、春秋には、昼間に上空を通過したり海峡を越えたりする群れが各地で観察できます。

このようなことから、北日本のヒヨドリの大部分が南日本に渡るということがわかるわけですが、中部日本のヒヨドリは、ということになると、よくわかっていないのです。

「部分的渡り鳥」ということばは、こうして、ふたつの意味をもっているわけですが、同一種内でこのふたつのタイプの移動をするものも、少なくないのです。

南北に広い繁殖分布域を持つ種では、もっとも北の地域に繁殖する個体はすべてが渡りをし、中間の地域で繁殖する個体は一部が渡り、南にいくにしたがって渡る個体が少なくなり、南部ではついに渡りをしない、という手のこんだことになる場合さえあります。しかし、実際には、これから述べようとしているものにくらべれば、これでもまだ簡単なほうなのです。

その前に、「渡り鳥」という言葉について考えてみると、この言葉は、この場合に1羽1羽の鳥に対して使われているのであって、ヒヨドリとか日本のゴイサギとかいう、種やその一地域の個体全部をさしているのではないのです。

わたしたちが、「オオルリは渡り鳥だ」という場合の"渡り鳥"とは種全体を意味していますが、「日本のカッコウは渡り鳥だ」という場合はある地域の鳥という意味だし、「このゴイサギは渡り鳥だ」といえば1羽の鳥だけについていっていることになります。

ついでに「部分的渡り鳥」についていえば、種あるいは地域の鳥については使いますが、1羽の鳥についてはこの言葉は使いません。

そこで、「ヒヨドリ（種です）は渡り鳥ですか」という質問に答えるのはたいへんやっかいなのです。「北海道のヒヨドリのなかには渡り鳥もありますが……」というような、質問者からすれば、はぐらかされた感じの答えしかできないのですから。

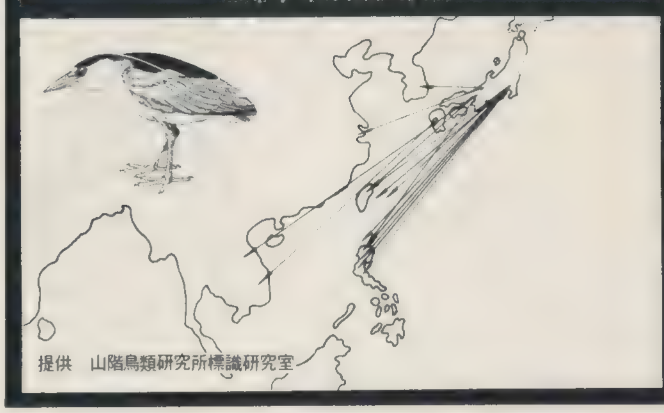
結論的にいえば、《渡り鳥》と《留鳥》とは、はっきり区別できないのだ

同じ地域で繁殖する同種の鳥のうち、一部の鳥だけが移動する「部分的渡り鳥」の現象が起こる原因はなんなのでしょうか。

年齢や性別によって、移動する個体の割合が違うという傾向は、いろいろな鳥で知られています。

いちばん移動しないのは雄の成鳥で、雌の成鳥と雄の若鳥がこれに次ぎ、いちばん移動しやすいのは雌の若鳥です。この点でくわしく研究された鳥はまだわずかなのですが、この傾向は、移動に関しても、それ以外のいろいろな面でも見られるのです。俗な表現をすれば、「雄と年寄りは保守的で、雌と子どもは落ちつ

ゴイサギの回収報告



提供 山階鳥類研究所標識研究室

カラーページ解説

＊ ——→

かくして1か月もするとひなはすっかり成長して親鳥と同じくらいの大きさになり、やがて巣立ちする。巣立ったひなは近くの水田や湿地に飛んでいって自分でえさをあさるが、しだいに採食のための飛翔距離をのばしていき、やがてそのまま出先にねぐらを構えて、夜も繁殖地にもどらなくなる。さらに、夏も終りに近づくと、川沿いに移動を起こし、海岸地方へと移っていく。おそらく海岸地方のどこかに集合して群れをつくり、南の越冬地へと旅立っていくのであろう。

食性と生態的条件

サギの仲間は、池や水田、湿地などにすむ小魚、アメリカザリガニ、カエル、オタマジャクシ、タニシなどのほか、ゴミムシ、ゲンゴロウ、アブ、トンボのヤゴといった昆虫（こんちゅう）類を食物としており、湿地の生態系では第3次、第4次の消費者という地位を占めている。したがって農薬やPCBなどは何回か生物濃縮されたものを取り入れているので、こうしたものの影響を強く受け、その中毒による産卵率の低下や斃死(へいし)の増加などの現象を引き起こしやすい。また、農村の都市化による環境の変化もサギの生活に大きな影響を与え、ときには繁殖地の存亡をも支配している。しかし、そもそもサギはどんな条件のところを繁殖地とするのであろうか？



ゴイサギの巣 撮影 筆者

一般に野鳥が繁殖するためには、鳥の生理的条件、土地の生態的条件、社会的条件がうまくそろわなければならない。野田のサギ山をはじめ、いくつかの繁殖地から知りえたサギの生態的条件には、①近くに川または大きな池沼がある、②近くに採食地となりうる場所がある、③樹冠が地表をおおう程度に密生した森や林である、などがあげられる。しかし、これだけでは同じような場所はいくらでもある。そのなかからいつも特定の地が選ばれるのは、さらに、営巣している林内、樹下に人間がはいらないという条件が加わっているためであると考えられる。人間が林内にはいらなければ、自然に下草や低木層が発達し、林内の見通しを悪くして鳥を落ちつかせることにもなるのである。

現在、都市の開発が進み、残されている貴重な自然も観光地化される傾向が強い。しかしこうした生態的条件をじゅうぶん考慮して、自然保護、野鳥保護に反する結果を招来しないよう気をつけてもらいたいものである。サギの生活の概略の説明を終わるにあたり、この一文が少しでもサギの保護に役だつことができれば、まことに幸いである。■

（埼玉県立浦和高校教諭）

ハシグロヒタキの渡り



メボソムシクイの渡り



きがない」ということなのですが，どうも部分的渡り鳥とそれとは関係がありそうなのです。このように，人間も，動物の一種としてこの傾向を持っていることは興味深いことです。

ところで，これまでは移動の距離についてはあまりふれてきませんでした。ふつう「渡りの話」というと，長距離の移動ばかりが強調され，読む側も「渡りとは長距離の移動だ」と誤解しやすいのですが，実際にはそんな長いのばかりではありません。

確かにキョクアジサシのように1万5000キロという地球を半分まわってしまうようなものもありますが，短いものになると，1キロ以下というのも珍しくないのです。たとえば，山地や高山で繁殖する鳥が非繁殖期にはより低い所へ下って過ごすといった場合です。

日本の場合，脚環をつけた鳥で，山腹を数キロ下へ移動をしているものが確認されたわけではありませんが，繁殖分布域と非繁殖分布域とをくらべてみると，全体としての上下移動があることは明らかです。

たとえば日本特産のカヤクグリは，全体が高山で繁殖し，非繁殖期は山地から低山で過ごします。またウグイスは，低地から高山まで広く繁殖しますけれども，非繁殖期には少なくとも高山からは姿を消してしまいます。ヒガラやコガラは冬でも高山に残る個体がありますが，冬になると，繁殖期には見られない低地に姿を現わす個体がかなりある，といったぐあいです。

これらの鳥は，これと同時に南北の移動もすると思われるので話はやっかいなのですが，なかには，数キロしか移動しないものもあると考えてよいでしょう。

カヤクグリ，ウグイス，ヒガラの例は，前述した「典型的渡り鳥」と，ふたつの「部分的渡り鳥」に，それぞれ対応した上下移動なのです。南北の地理的な渡りと，この上下垂直的な移動とに，本質的な違いはないわけで，この両者が組み合わさった渡りがあっても不思議ではありません。

定期的移動という問題においては，距離の長短や南北か上下かといったことは，実はそれほど重要なことではないのです。

ここにもうひとつの事実があるのですが，ウグイス，メジロ，ヒヨドリなどは，繁殖期には住宅地にいないのに（東京のヒヨドリはこの2，3年少し妙になってきましたが），非繁殖期になると姿を見せるのがふつうなのです。

これは，非繁殖期になって行動範囲をひろげた結果そうなる，という場合もあるでしょうが，非繁殖期には異なった環境へ移動する個体もある，と考えざるを得ないほど離れた住宅地に姿を見せるものもあります。

ムクドリ，スズメ，ヒバリなどでもよく観察すると，これと同じような移動をしている，と思われる場合があります。脚環をつけた研究によらなければ，はっきりしたことはいえませんが，その個体が，ごく近くからきた可能性は否定できないのです。

このような短距離の移動について「渡りだ」という人もあるし，「そうではない」という人もあるのですが，鳥全体を見渡すと，典型的な長距離の渡りから，このようなものまでひとつづきになっているということです。

ですから，その中間段階のどこにも，「渡りである」，「渡りでない」という線を引くところがない，というのが事実なのです。したがって，《渡り鳥》と《留鳥》とのあいだには，移動をする個体の割合からしても，移動する距離からしても，はっきりした区別はない，といえるのです。

南北に渡るのがふつうだが，常軌を逸して東西にあるいは逆に，北へ避暑にいく鳥もいるのだ

さて，今まで見てきた例では，移動の距離や，移動する個体の割合に違いはあっても，2か所の定住地のあいだを，毎年定期的に往復するという共通点を持っています。

日本のような北半球の温帯だけを念頭におくと，春に北方（または高地）の繁殖地へ向かい，秋に南方（または低地）の越冬地へ向かう，という往復のしかたも共通点に加えてよさそうに思えます。

実際，教科書・学習雑誌・ジャーナリズムなどでは，長距離移動，種の全個体移動に，この特徴を加えたものを「渡り鳥」としています。日本の鳥の大半は確かにそうなのですが，鳥に見られる移動は，決してこれだけではないのです。

毎年の定期的往復という共通性を示すもののうち，ふつうは繁殖分布域と非繁殖分布域とが地理的にほぼ南北の位置関係になっているのです。その場合，したがって移動も，地形などによって多少の違いはありますが，ほぼ南北に移動しています。

しかし，（ふつうの）渡りのイメージ（虚像）に反した渡りをするものも少なくないのです。

バルト海周辺から，ソ連北部にかけての鳥のなかには，ほぼ真西に移動してイギリスやオランダあたりとを往復しているものが，いくつも知られています。このことは，ヨーロッパでは同緯度でも西部のほうが冬が穏やかなことと関係しています。

日本も，アジア大陸より冬が穏やかですから，標識調査がもっと大規模に行なわれるようになれば，大陸からほぼ真東へ移動して日本で越冬している鳥が発見される可能性もあります。

これとは違った形式での東西に近い移動もあります。ユーラシア大陸の北部の，ほぼ端から端まで，種によっては東はアラスカまで，西はグリーンランドやカナダ北東部までの広い繁殖分布域をもつ鳥も一部に見られるものです。

このような鳥のなかには，メボソムシクイのように東南アジアだけで越冬してインドやアフリカにはいかないものや，その反対にハシグロビタキのようにアフリカでだけ越冬して，南アジアにいかないものがあります。

北ヨーロッパのメボソムシクイは東南アジアへいき，アラスカのハシグロビタキはアフリカ（または中東？）へいくのです。これはおそらく，かつてはユーラシア北部の東側から西側だけで繁殖し，南北に渡っていたものが，近年になって繁殖分布域を東や西にひろげたものなのでしょう。実際，メボソムシクイが北ヨーロッパで繁殖するようになったのは，最近のことです。

これに関連して興味深い事実があります。ヨーロッパ産のヒワの1種，セリンは，約100年前までは地中海周辺の留鳥だったのが繁殖分布域をしだいに北へひろげて，ついにはバルト海沿岸にまで到達しました。そして，新しくひろがったところで繁殖する鳥は，秋になると地中海沿岸の故郷へ帰ってしまうのです。

このことは，《渡り》が，このようにして始まることもある，ということを示す貴重な実例です。

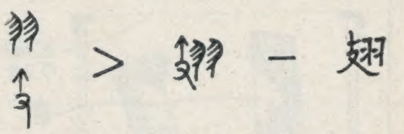
また，アフリカでは，早春にサハラ砂漠北部で繁殖したのち，北へ移動して地中海岸へ避暑にいく鳥が知られています。これは，他の北半球の鳥の大半が繁殖後は南へ避寒にいくのに対して，移動方向がまったく逆なのです。■

（山階鳥類研究所所員）

え　牧野四子吉

漢字のふるさと　92

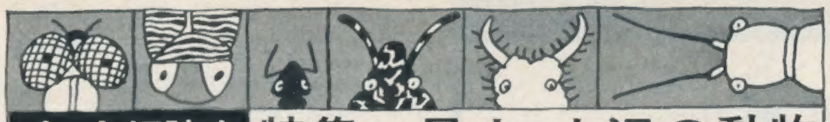
藤堂明保



翅（はね）　ペアをなす2枚の羽を「翼」というが，一方の羽だけなら翅（シ）と呼ぶのである。

翅という字は，「羽＋支」からなっている。「支」とは，1本の竹の小枝を手にもった姿を描いた字であるから，枝（シ）のもとになる字だと考えてよかろう。だから「支」を含んでいる字は，「短い枝のようにひとすじ」という意味を含んでいる。たとえば人間のボディでいうと，肢（シ）とは，胴体の幹から生えた枝のような手足のことである。その4本の手足をあわせて四肢という。

鳥のボディでいうなら，その胴体からわかれ出た足と羽とは，ちょうど幹から生えた枝にあたる。そこで「羽＋支（えだ）」を合わせて翅と書き，はねを表わしたのである。翼の場合はつねにペアをなしたツバサを念頭においているのだが，翅はそうとはかぎらない。片方であろうと，鳥の羽を枝に見たてて翅と呼んだのである。■



ペット相談室 特集＝昆虫・水辺の動物

カブトムシとクワガタ

担当　矢島　稔

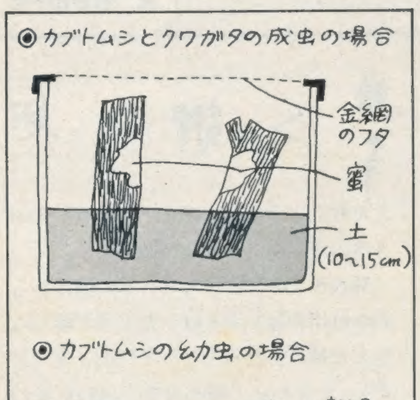
デパートで売っている昆虫の花形ですが，自然林のなかで見つけたことのある人は意外に少ないでしょう。かれらの生活場所はクヌギやコナラの雑木林です。活動時間は7月から8月の朝と夕方で，樹液のしみ出ている所にとまっています。

成虫の飼い方については，本誌116号「コクワガタの飼い方」の項でふれておきましたので，卵から成虫までの育て方を述べてみます。

飼育箱は，やや大きめの水槽が最適です。下に腐葉土を10～15センチほど入れます。ただし市販の腐葉土には薬品処理してあるものが多く，産卵場所用には不向きです。林床の土がよいのですが，オガクズをある程度ねかしたものでも代用になります。

そこに，図のように太めの止まり木を2，3本立てて，黒砂糖液や2倍に薄めたハチ蜜を筆で塗りつけます。えさを塗る場所を1か所にしておくと，順位争いを観察することができます。2，3日留守にするような場合は，リンゴを固定し，3，4か所皮をむいておくとよいでしょう。先号でも述べたように，カブトムシの飼い方のポイントは，えさをとるときの止まり木などをつくってやることと，日中もぐりこんで休めるような土を入れることです。

雌は土のなかに卵を産みます。丸い乳白色の卵は，はじめは直径3ミリくらいですが，日がたつと5ミリほどに成長します。このころの卵はデリケートで，掘りだすために指で持ったりすると孵化しないことがあります。卵は10日前後でかえりますから，幼虫が見つかったら別の容器に入れかえたほうがよいでしょう。



容器には，なるべく大きな素焼きの植木鉢がよく，底の穴はしっかり土で閉ざします。木箱では食いやぶられることがありますので要注意です。

植木鉢にほぼいっぱいの腐葉土を入れ，上にむしろなどをかぶせます。置き場所は屋外のほうがよく，軒下で雨を避けられるようなところを選びます。

腐葉土を使えば，とくに幼虫用のえさはいりません。



何日かたって，土の上層にネズミのふんを平らにしたようなものが見つかります。これは幼虫のふんで，分量が多くなってきたときは，腐葉土を入れかえてください。そのためには，腐葉土か，古いオガクズの用意が必要です。

幼虫は，翌年5月ごろまで成長を続けます。成虫の雄の寿命は約30～40日で，雌は雄より10日くらい長いのがふつうです。

カブトムシと同じ方法で飼育できるものには，カナブンやコガネムシ類などがあります。

カブトムシとともに，なじみ深いクワガタで身近な種類はノコギリクワガタとコクワガタでしょう。

成虫の生活はカブトムシと同じですが，産卵場所と幼虫のすみかは違います。雌は雑木林のなかにある朽ち木に産卵し，幼虫は朽ち木を食べて成長し，成虫になるまでそのなかで暮らします。ですから，クワガタの成虫を飼う場合はカブトムシと同じですが，幼虫の場合は朽ち木が必要です。

朽ち木のかわりに腐葉土やオガクズでやろうとするためには，かれらが部屋をつくれるような固めた状態にする必要があります。またこれは幼虫がえさをかじりとる性質のためにもたいせつなことなのです。クワガタがカブトムシのように大量に飼育できないのはこういう所に違いがあるからといえましょう。なお，この場合のオガクズはナラやクヌギなどの広葉樹のものがよく，マツやツガなどではうまくいきません。■

（多摩動物公園昆虫飼育係長）

カニ類

担当　杉浦　宏

カニは種類が多く，アサリやハマグリのなかにいるカクレガニのように小さいものから，タカアシガニのように2メートルにもなるものまでいて，それぞれ生活場所を異にしています。

カニは波打ちぎわの岩にいるものと決めこむのは早計です。潮だまりにはえている海藻のなかをよく見てください。背甲や10本の脚にカイメンや海藻，なかにはまわりのごみまで付けて身を隠しているカニがいるはずです。イソクズガニ，ワタクズガニなどで，動作が鈍いだけに見つけにくいカニです。砂浜には，左右のハサミの大きさが極端に違うシオマネキなどがいて，干潮時には穴から出てきてえさをあさったり，穴を掘ったりしている姿に出くわします。また，海岸に近い水田や湿気の多いくさむらや人家のまわりにも，アカテガニ，クロベンケイガニやアシハラガニなどがいます。山間の渓流にすむカニはサワガニで，水のきれいな小川の石のあいだにすんでいますが，日本にはこの1種しかいません。

海にいるカニを入手するのはたいへんですが，刺網漁をしている漁村で，網にかかった商品価値のないトラフカラッパやマンジュウガニを分けてもらうのも，ひとつの方法です。

捕えるには網を使うのが有効です。その際，カニには自切といって外敵から身を守る手段として脚がとれやすくなっていますから注意しましょう。

飼い方については，ワタリガニやトラフカラッパのように海水のなかにいる種類については，海水を循環させたり，濾過する装置がいりますので，少し大げさになります。他の種類は，飼育箱の3分の1を淡水，あと3分の2を砂または土で〝陸地〟にしてやるだけでじゅうぶん飼えます。岩などを入れて隠れ場所をつくってやるのもいいのですが，冬の寒い日などにもぐり込んだりするためには，砂や土で山をつくってやったほうがよいでしょう。サワガニも同じようにして飼えますが，夏の間は涼しいところに飼育箱を置いてあげてください。

えさは動物質のだけのものでよく，生魚を細かく切ってやったり，シラスのような小魚，またカツオブシもよく食べます。ご飯粒だけではだめです。アカテガニを3年以上も飼っている子どもを知っていますが，じょうずに飼えば長生きもするのです。

観察のポイントには，成長過程の脱皮があります。脱皮の周期は，種によって違いますが，あまり季節には関係がなく，えさの与えぐあいと密接な関係があり，早ければ1か月で脱皮します。脱皮の観察をするうえでの注意は，本誌28号に述べてありますので繰り返しませんが，自切によって失った脚が再生して，脱皮のあとにはすべての脚がそろっているのを見るのは楽しいことです。新しい足は，脱皮までの間に皮下で，徐々に再生が進み準備されるのですが，外見的には，脱皮という衣替えのとき，突然はえてきたように見えるのです。1回の脱皮で，甲羅がどのくらい大きくなるかを記録することも忘れないでください。



脚の自切についての実験は，あまり感心しませんが，ハサミ以外の8本の脚のうち1本くらいなら，とれてもカニは生きていけます。その場合も，脱皮するまで飼う覚悟でなら，脚を取ってみるのも観察のためには許されることだと思います。

従来，カニは海岸で取ってもえさが悪いために，すぐ死なしてしまう場合が多いようですが，ちょっとした注意だけで長く飼育でき，観察するにもおもしろい要素を持った動物なのです。■

（上野動物園水族館飼育係長）

裏表紙説明

ライオンの夫婦　真摯な表情というのは美しいものだ。だが，それが生理的な欲求と結びついたとき，しばしばもの悲しい滑稽さを伴う。たとえば人が食物を口に運ぶときにふと見せる真剣さは，それが謹厳な人であり，美しい人であるほど，失望をまじえた奇妙な安心感を与えるものだ。だからこそ，そんなとき人は意味もなく笑ってみせたりするのだろう。

ところで，発情期を迎えた雄ライオンは，ライバルとの熾烈な争いをへて，伴侶となるべき雌を前にすると，まるでみずからの緊張に絶えきれないかのように，鼻にしわを寄せ，歯をむきだしにして咆哮する。そして，雌をやさしくなめまわし，じゃれあったあと，雌の背後から走り寄って，尻に鼻を寄せたりする。交尾するのはそのあとである。このように交尾に先立って長い〝前戯〟を伴うのも，日ごろ〝百獣の王〟として動物界に君臨するライオンだけに，真剣な，しかし生理的な行為に対して一種の〝照れ〟があるためかもしれない。■

Ph. A. Schmidecker

次号予告
7月25日発売



アフリカハゲコウ

世界動物百科
123号　8／5

カラーページ

ヒロハシサギ科　ヒロハシサギ
ハシビロコウ科　ハシビロコウ
シュモクドリ科　シュモクドリ
コウノトリ科　クロスキハシコウ
　コウノトリ，アフリカハゲコウ
トキ科　アフリカクロトキ，トキ
　ブロンズトキ，ヘラサギ

私たちの仲間

マタギの心が追う異形のこぶグマ 幻の動物を追って　5	編集部
密林の極彩色 アマゾン動物記 34	伊沢紘生
トキの生態 カラーページ解説	佐藤春雄
続・鳥の世界――もうひとつの見方 3 帰ってこない渡り鳥	浦本昌紀
漢字のふるさと 93 飛（とぶ）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
　東京都千代田区有楽町2－3　〒100
　TEL. 03―212―0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
　大阪市北区中之島3－3　〒530
　TEL. 06―231―0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
　北九州市小倉区砂津1―12―1　〒802
　TEL. 093―531―1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
　名古屋市中区栄1―3―3　〒460
　TEL. 052―231―8131

世界動物百科　通巻123号　昭和48年7月29日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ライオンの夫婦　説明 30ページ

雑誌0635－7／29